

名 称	岩倉具視文書 西川本
標 題	岩倉、朝鮮事件ニ付テ、意見覚書 井上馨。書翰 27他

分 類 番 号	
	362

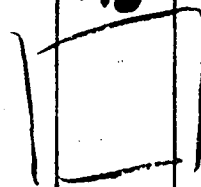
国立国会図書館

登録番号	
------	--

朝解不禮曹判書李曾正等差
有到東寺寺官等上申此也

西歷壬午年八月廿日

外解御井之務



太政大臣三條實家

大朝鮮國禮曹判書李

會正

呈書

大日本國外務卿井上馨

閣下

謹茲照會者竊念

貴國與敝邦修睦久已三百年、近因開港通商、往來交驛、
亦且為六七年、慶賀慰哀無少間然、校藝書藝習俾、
其妙自幸敦好、共享安樂、而敝邦軍民為狃習
少見多怪、每

貴國人來、輒懷疑懼、

貴國人見敝邦人、亦種種雜詆、滋弊非常、此則

貴朝廷諒必有素笑、不自意本月初九日敵邦兵民始由

小事忽為肆怒、千倡萬應、蟻集蜂起、爰出頃刻人

莫敵格、毀破屋舍戕人命、粹入教場、手犯教師防

不勝防、三人被死而死僵路傍、又為四人經劫清水

館、乘山隕突、因風縱火、

貴國人放砲揮劍、殺死我人殆近數十、豈但敵邦之不

幸、抑亦為

貴國之不幸也、無知軍民、不自解散、初十日、劫害我大

臣、搶入我

宮闕、致突咆哮、驚動

君父

王婉屏避、宰臣三人、被執見殺、此千古所無之大變也、花房
公使見機、圖避、至濟物浦、駛船鼓輪、未知時日之
間已抵

貴國否、兵民追及仁川、路上所殺者為六人、并與留京被
殺者、俱為厚瘞、豎標明白、容俟考驗、自底不誣也、
守場駐機、鎮安為重、幸賴我

國太公威信素洽、寬嚴互用、親冒鋒鏑之間、晚諭分義、
莫不感戴退散、矜紳耆幼、情而無恐、此實敬邦
宗社生靈之福也、自茲以還、凡在申約、彼此照應、永締旧好、

各共適示、則可謂由於不幸而歸於大幸、想維
貴朝廷決不以為過語也、此頌台安、不備、

壬午年六月日

禮曹判書李 會正

大朝鮮禮曹判書李

會正 呈書

大日本國外務卿井上馨

閣下

謹茲照會者、敝邦往年、叙說統理機務衙門、分實
同文司、書契往復、各當其職、奈交涉之際、多有紊
錯、反不若照旧之為安便也、今茲罷革、實出實規、嗣
後敝政府之於

貴政府、故曹之於

貴外務省、仍前例、永遵無貳、想必

貴朝廷亦加印可也、順候

台棋不莊不備。

壬午年六月 日

禮曹判書李

會正

大朝鮮國禮曹判書

會正

呈書

大日本國外務卿井上馨閣下

謹茲照會者、故邦之禁所、陵嶋、非間界也、頃因

貴國人斫樹木、早奉書報、藉蒙

貴邦廷另許禁止、故邦委遣檢察使李奎遠、周視島界

歸言所採仍前無改、

貴邦迫不及立禁、而臣猶冒犯不韙、特深誦議、端而奉質、

望

貴朝廷照諒設法、

婉諭嚴防、毋蹈前謬、幸甚、敬聞
台祉辰安不宣、

壬午年六月 日

禮曹判書李

會正

科啓云、朝鮮國主咸、於、激使、日、若、茂、以、公、
 使、館、之、襲、擊、之、長、寄、表、花、房、公、使、電、報、到、
 達、之、趣、過、刻、外、館、之、日、而、之、有、事、り、若、
 易、事、件、之、今、後、而、用、之、可、之、事、知、之、其、
 主、之、難、以、件、之、宜、何、自、之、速、何、分、之、
 議、被、之、其、國、之、其、得、其、語、電、報、之、趣、之、日、政、府、
 之、其、化、之、不、被、斗、且、に、川、邊、之、に、激、使、之、起、之、勢、
 之、其、金、山、元、山、津、之、少、決、之、若、我、人、民、保、護、之、義、一、
 日、之、思、之、人、力、之、其、決、之、若、花、房、語、來、之、日、金、山、之、護、

謝鑑茲造之義の至急なる所を成つたす故に
 迄々之、其の事件、兩國間、勿論他外
 國へ對し團體關係を以てして、
 断然ツ決ハル來、要する所、非行ヲ来すは極
 るより、一應讓渡延滞は、
 内不平な事種、浮説ヲ唱へ心ヲ誘惑せむ少く妨
 害ヲ来スヘリ。今全國ノ意見ニ察ある大前年台
 議ノ事件ノ際、其時勢力有る者、第一出兵云々
 出来ハテ、事に至り、
 浮説甚多、極へず不遑、此軍法ヲ以て震動を蒙る

七月

黑田清隆

三修山
岩倉山

園山

今日以進歩後外務卿有花房公使談判之見
上之旨伺之々々多々之趣

暑候之罪人なり

相成儀金之取なり

開市開港之害之取なり

松島之割之取なり

山崎の海軍中隊人等

大に汗、別に進歩之趣之是等之事、凡そ極密
之事故の勢つて、開市出港、花房公使實り、今

指揮諸部令言一日便如八分張一市
 上者古田府一之委理外務司司
 有所以物所如以也

香樹齋

實美

徽公

主事之用事多之者外路有達之通也
日者有主事之者其主事之者其主事之者
下主為金中上主也 其主事之者

日之

其主事之者

其主事之者

其主事之者

而啓今般朝鮮事件ニ付ス日相湯主部郡見據陳述
且昨夕短橋ヲ以テ上申付起ス之々般之思ハナキ事之團併
ニ関シテ容易事件ニシテ中外人ノ注目スル所ナキハ勿論
ヲ尽セタリ唯其重要ナル所ハ和戰ニ字ニ其之和戰決
固ヨリ

宸裁ニ在リ而大臣ノ外與聞ヲシ湯主所ニ付凡ノ事
ヲ謀ル先ツ其難キ處ニ目的多シサハ事變ニ付テ窮迫
ノ憂ナキ能ハス且富ヲ除リテ之ヲ様先ニ持サハ其弱事ニ深
クシテ之ヲ處スル蓋難キハ必然ノ理ニシテ諺ニ可謂一ツ各々

百ヲ失フ。諸ノ免セシメ至ヘ。故ニ今由ノ事件。願。謀。決。止。所。
一日。過。亞。カ。ス。ト。多。多。柳。花。房。公。使。護。送。義。唯。其。手。
順。シ。盡。サ。レ。此。ノ。地。主。後。、。操。理。事。判。然。ナ。リ。其。後。
高。詮。議。ニ。出。リ。事。ノ。重。大。歟。ニ。總。政。府。改。革。太。院。君。政。
ヲ。執。ル。ヲ。報。知。據。ニ。至。リ。事。者。、。請。制。ニ。事。ヲ。入。ル。事。
北。旦。諸。國。軍。艦。云。々。ノ。事。情。々。々。之。速。ニ。以。様。實。少。權。
ヲ。委。不。シ。レ。リ。使。少。郎。以。善。道。方。事。者。尤。第。一。欲。以。不。法。ノ。
舉。動。ニ。出。時。ハ。止。ニ。可。戰。ノ。事。、。軍。ヲ。移。其。多。權。後。任。
セ。レ。シ。是。隊。准。備。留。少。安。少。事。及。旦。又。今。如。ノ。舉。動。者。尤。
モ。重。重。ト。有。集。、。魯。諸。西。國。、。之。諸。國。、。重。ヲ。緩。慢。

[illegible]

特操す。況、無、國、市、法、是、三、井、ノ、多、事、也、改、府、
断、行、ノ、主、義、也、爲、ニ、豪、を、深、説、初、カ、サ、サ、サ、初、
初、ノ、主、義、也、爲、ニ、豪、を、深、説、初、カ、サ、サ、サ、初、

按後世者曰大輔之意見也一國之
以出而之者其意也上之刻際之要之
事其意見也其意也上之刻際之要之
上其意也其意也上之刻際之要之

其意也

其意也

其意也

其意也

從馬達島起二日太海古港開帆江華濟二

赴、電報需電常下室中、手書地策、機料

、機料致油斷去敵可戒事、凡

今日井上毅の少人舎、事始漸多淺き程度

日、ある者も晩機料致明日出居公以馬下事

情、今、上申下所、上、所、所、所

7月6日

有田

五
府
公
關
下

先制被仰令而條直山縣集議
中丞多處以司事而守以若被上議
君之乃可敢事之定端多所建其
片似其再心

目旨

殺

君大臣殺國

若食相公古志帝圖不日金

振海石策之終玉_亦子開見

貴公使食皇反梓始聞故高遠執病墮
摧裂衣_情紅_可如堪從切悚愧_言可遠即
井上余漢大人以現前事果_言譚判其詳
休然

勿盼而竟_言何_言多_言堪_言候告地日_言再期_言
悔即_言而國之_言廢_言神_言眩_言邁_言不_言盡_言罪_言意_言
只_言依_言祈

白體康
暗

生焉自若

生焉自若

少金玉均

徐光範白

一 朝鮮人依頼者再々固辭する

一 謁見する改め

内務省迄来る

一 債金より内務省に貸付た十ヶ年賦の利息を以て我
力者より船舶砲銃鬼貝等商賣に教師を以て
借入せるものなり

一 釜根渡山掘削より兵制改革數ヶ年練兵を以てする

一 政略

一 國民ヲシテ 信賴セシメ不識、
知能セシムル事

一 我進ニテ支那政府、直接談判云々

一 條約各國政府ト協同熟議ニ獨立屬國を根

交ヲ取ル云々

一 亞細亞全面ヲ以テ同進トスル云々

一 日清戦終リ一夫ヲ利不利云々

一 日清戦争終リ一夫ヲ利不利云々

一 海陸軍擴張を急務ニ領土ヲ清ク爲止

ムヲ得カレ、出ル云々

一 獨立云々、朝鮮國、但セ依然ニ露、川支出来、

分ハ計案ハ判然明云シ支那政府ニ公然此ヲ宣
ナキ事ハ然レドモ

・清政府周旋朝鮮各國ト案約スルノ當リ外交四
政自主、任スル、及ヒ花房、當シテ建忠獨屬
之四話

右案ニ悉考スルハ重大ノ件、レテ右西復丁寧オシ
方略ヲ定ムルハ今日ニ在ルシ今般一件好結果ヲ得
各國賞賛スル所トナリ然ルニ迄ハ因情ヲ以テ清國臺
海臨球苦ミ遺憾ヲ重サネ大テ、玉光時ニ宣下案

只多難ヲ招キ名譽ヲ失フ、必ラン乎ト耳ニテ之ヲ
但外人ノ貧困ヨリ負債ヲ起スモ日清有國ニ依ルノ
難ナリ然レハ多ク勿ク柔弱者ノ人ニ法有國ヲ以テ
父母ノ國トスルニ由テ法有國ニ依ルノ
此イテナク誤ルモノト多ク手

右出七意是

考相後世萬物之歸何盡家第一才二才都テ口見ハ以
 其玉三才所歸少形物を他レ譲ル高リカク極秘スモ
 他人知之必然ト云々係何レ他金ハ通知シタニ上リヤ
 復ル事、い子中一又何レ公金ト制限ヲ立品物也与
 或ハ士買出貸スモ於法其ノ精糖ト爲ハ充分預知
 下中決テ秘密ト云ハ、考ヘテ去ル係外交上ノ事付牙
 一方衆ノ他金ハ四議之、駐清五杯ト公然論議スル様ナ
 シハ決テ不調又是等ノ政界ヲ公明正大杯ト出無キ可成
 局ニ至リ難位ナレハ外交ノ難ハ更ハ去ル若ト考ヘテ又

沙漏清玉、いふに遠内干戈ヲ勦カス。至ル極ニ必ズトモ
 所、又之ヲ適ニシ、策コトハ最初生於内閣論を以テ
 清玉シラ属ホク、實使奉朝鮮ニ條約正法政々直接
 、お後朝鮮ニ只通商條約止リテ、左スレバ清モ我一
 歩譲ヘヌヲ分リ終ニ振ス。モアチ付テ中々ある、
 係以福子ナシ上ニ朝鮮シテ獨^立セシムン。了定セサルヲ得
 方スレバ朝鮮ノ内外政々自ラ于涉セサルヲ得ス。又秘密ニ
 策取テ不強ク、得テ結果清玉葛藤生ズルニ至ミ難
 保故、海陸軍派以テ看。ま、甘ラ前途金斗ノ目的ヲ
 有テ、極力ノ急トシテ、一週以内、決メ、故、前後シ

成りて其時、以考蓋り斯之也、何し明日好眉より上り
市より用い給後

十月十九日

聲

右府監下

名 称	岩倉具視文書
標 題	海江田信義京久書他

分 類 番 号	
	363

国立国会図書館

登録番号	
------	--

朝鮮處變ノ議

本月二十三日午後五時朝鮮國ノ激徒數百人不急我公使館ヲ襲撃シ矢石銃丸ヲ飛ハレ放火ヲ為セリ是於テ我公使等ニ防禦七時間ノ経ント雖モ朝鮮政府ノ援兵来ラズ故ニ一方ヲ切り開キ王宮ニ到ラシトスルモ城門堅ク鎖シテ開カズ止ムを得ズ仁川府へ立退キ休息セシ同府ノ兵又茲ニ起リテ不意ニ我ヲ襲撃シ巡查即死スル者二人手負スル者三人、其外ニ死傷スルモノアリ既ニシテ漸ク切り抜ケ濟物浦ヨリ船ニ上リ二十六日午至リ南洋沖ニテ英吉利ノ測量船出合キテ

レテ昨三十日長崎港に到着セリト云ヘリ實ニ此間軍ニ電
報ニテ其詳細ノ事情ヲ知ル由ナレトモ到底我公使館
ニ攻撃シ我日軍ヲ辱カレタル以上ハ國ヨリ我政府ニ於テ獨
立國ニ當リ措置ナカレバカラスナルヲ彼ノ暴徒等ニ其王
宮ヲ襲撃シ其捕國官タル関台鎬閔謙鎬等ノ邸宅
ヲモト攻撃セリト云ヘリ朝鮮政府ニ於テ此後ハ扇動
コナカルヘシトモ若シ方一朝鮮政府ニ於テ此暴行ヲ扇動
スルコトアラハ我政府ハ大ニ征韓ノ師ヲ起シテ之ヲ討伐ス
ヘキハ固ヨリ當然ノ大道ナリ候今ニ其政府ノ同意ニ出テサル
モ我政府ハ速カニ軍艦ヲ派遣シ我國民ノ彼國寄

留ル者ヲ保護セサルヲ得ス之ヲ要スルニ我政府ハ彼國政府

ノ扇動ト否トク問ハス先ッ我軍艦ヲ疾派シ彼國ノ寄留

スル者ヲ保護セシメ然レ後々辦理大臣ヲ特遣シ以テ我

羅害者等ノ為ノ謝罪及ヒ償金ヲ要求スル等ノ措置ヲ施シ

以テ一國政府タルノ職分ヲ尽シ我國体ヲ全フセサルヲ得サルヲ且

ツ支那ハ臺灣及ヒ琉球等ノ事件アリシ以來我國ノ怨恨ヲ

懷クテ甚々深キハ今四朝鮮ノ暴挙モ或ハ支那ハ扇動

出テシヤモ亦未タ測ルヘラス及今ヒ其扇動ヲキモ一朝ハ鮮ト

千戈ヲ接スルニ至ラハ其援助ヲ及スヤ必セリ實ニ今四ノ変事

ハ至重至大ノ關係アリ宣ニ慎戒ヲ加ヘスレシ可ナラシヤ

小官既、慶変ノ服稿アリ伏シテ願クハ小官、命レテ其
局、畜テラレヨク今朝朝鮮、変事アルヲ聞キ區々微
表自ラ禁スル能ハス歟、鄙見ヲ陳述スルコト此ノ如シ其
後圖ノ如キハ命ヲ候テ之ヲ上陳スルヲ謹白

明治十九年七月廿一日 元光院議官海江田信義

朝鮮處變ノ議

統房公使青木大佐ヨリ發セシ外務省及ヒ海軍卿ハノ電報ニ
由テ之ヲ考フルニ朝鮮國ノ王妃及ヒ世子ノ妃ハ既ニ賊徒ノ弑逆
スル所ト爲レリトアレハ賊徒等ハ其王宮ヲ襲撃シ終ニ之ヲ
陷シタルハ固ヨリ明白ナリ且ツ國王世子ハ僥倖ニシテ万死ヲ免
レタルヘシト雖トモ必ラスヤ幽囚ノ困辱ヲ蒙ルコト亦タ疑ヲ容
レズ曩^{キミ}公使ノ一行賊徒ノ圍ヲ衝キ脱散シタルノ一報アル
ヤ直チニ宣^{キミ}戰購和ノ特權ヲ委任セル辦理大臣ヲ派遣スルノ一
大須要ナルヲ建議セシト雖トモ當時我政府ノ廟議ハ鄭重ヲ旨

トセシヲ以テ先ツ京城ノ実況視察ノ為ト其談判ノ為ト花房
公使ヲノ再ニ渡韓セシノ其護衛トシテ二中隊ノ兵ヲ附セル丁ニ
議及シ其命ヲ傳シカ為ソ井上外務卿馬関出張ノ命ヲ奉
セリト云フ實ニ前日ノ電報ノミテハ此政策モ敢テ不可ナル
ヘシト坐トモ今日ニ至リテハ寧ロ因循姑息ノ政畧ナルカ如シ
何トナレハ若シ朝鮮政府ニシテ顛覆スルニ至ラス自ラ討賊
スルノ場合ナラハ花房公使モ亦ク依然スル大日本

天皇陛下ノ辦理公使タル資格ヲ以テ京城ニ入り諸般ノ談
判ヲ為シ得トシト坐トモ已ニ朝鮮政府ハ叛賊ノ有岐シ敵
早田王ノ政府ニアラサレハ花房公使ハ其新政府ニ向テ日本使

臣ノ資格ヲ失シタルモノト謂フヘシ故ニ今公使ヲノ再ニ京城遣
リ談判セシムルノ理由ハ政府ノ顛覆ト共ニ消滅スヘキナリ今ヤ
朝鮮政府ハ叛賊ノ有ニ服シタリ宜シク我政府ハ此叛賊ノ改
府ヲ以テ正當ナル朝鮮政府ト視做スヘカラス須ラク我國力ヲ以
テ彼國王ヲ援助シ其安寧ヲ計畫スヘキナリ彼ノ賊徒ハ實ニ
我日章旗ヲ辱シノ我國民ヲ屠殺セシ無礼ノ惡漢ナリ宜
シク万国公法ニ從テ其罪ヲ問ハサルヘカラス事機ハ須ラク神速
ナルヲ要ス故ニ和戰全權ノ問罪使ヲ速遣シ此事変ヲ處辨
セシムヘキナリ臣信義不肖短略ニシテ敢テ其任ニ當ラスト
至トモ其問罪ノ命ヲ奉レ尽ス所アラシク切望ノ至リ堪ヘス

伏^レ願^ス何^レ分^ノ御詮議ヲ以^テ當局ノ命^{アリ}之^ヲ誠恐
謹白

明治十五年八月八日

元老院議官海江田信義

三條太政大臣殿

岩倉右大臣殿

昨日黎公使ヨリノ啓文ニヨシハ清國ハ朝鮮事件ニ付為貴
國調停ト明言シタリ調停トハ熟字ノ意味ハ居仲息争ノ
義ニ在リ彼果シテ公法上ノ仲裁ノ針路出ル又ハ他方
法ニ出ルカ豫定シ難シ但シ是ヲ想像スルニ左ノ三ツノ場合ニ
ニ過キザルベシ

第一清國ハ朝鮮其屬國ナルコトヲ主張シ今度ノ談判ハ
清國ハ引受ケベシト明言ス

第二清國ハ日本朝鮮ニ關スル仲裁ヲ申入ル

第三清國ハ極シテ平穩ノ言詞ヲナシ我カ使節ト強クシ

直接ノ談判ヲナサズニテ只ク其朝鮮ニ從來ノ關係ヲ
ルニツイテ彼國人爲ニ忠告シ其謝罪處分ヲ催促スヘキ
旨ヲ公告スル止ム

右第一ノ場合ニオイテ我レ左ノ大意ヲ以テ拒絶スベシ

日本ノ朝鮮ニ於ケル交際ハ三百年來直接ニ往復シ
曾テ清國ノ居仲ヲ經由セズ

明治八年秋朝鮮ノ暴徒我々雲揚艦ヲ砲撃シ我
國其罪ヲ問フ時ニ當テ曾テ清國ノ居仲ヲ煩ハシタル
事無シ

當時我々森公使ハ總理衙門ニ向テ清國ノ朝鮮ニ於テ

ル關係ヲ問ヒタルニ總理衙門ハ朝鮮ハ其屬國ナリト雖モ其國政ニ干涉セズトノ旨ヲ答ヘ雲揚艦暴舉ノイハ之ヲ不問
甘シ曾テ我國ヲ為シ邊難スルニ意思ナラリシ

右ノ事由ナルニ據リ我國ハ朝鮮ト直接ニ對等ノ條約
ヲ締ヒ清國ノ居仲ヲ經由セズ平和ニ交際シ以テ今日ニ至
ル

故ニ今度ノ事若シ戦争ヲ開クノ場合ニ至ルトキハ他ノ外
國ハ或ハ局外ニ中立スル欽或ハ兩國中ノ一國ニ與國トナル
欽其隨意ニ任スト雖モ平和ノ交際ニ於テ決シテ他國ノ
干涉ヲ容ルニスト無シ今日我國ハ朝鮮ニ向テ仍ホ平和

ノ交際ニシテ即チ明治九年ノ條約ヲ続カントスル者
ナレハ條約記名ノ雙方ノ外ニ他ノ關係ナシ

若清國第二ノ場合ニ出ル時ハ我レハ明カニ公法上ニ云ヘシ

甲乙二國ノ紛争ニ際シ丙國仲裁ヲ申入ルハ必甲乙二國ノ
承諾ヲ要スベシ若二國ノ中一國仲裁ヲ承諾セザルハ丙
國ハ仲裁ヲ強ルコト能ハス

トノ理ニ據リ我國ハ仲裁ヲ辭スベシ

若シ第三ノ場合ニ出ル時ハ我國ハ枝葉ノ葛藤ニ涉ラズシテ
一直線ニ朝鮮トノ談判ヲ遂ケ清國ノ朝鮮ニ向テ忠
告シ又ハ盡カスルハ我が關係ノ外ニ置キ更ニ其障礙ヲ為

サズ又是ヲ承諾スルノ言ヲ為サズシテ可ナリ

花房公使ハ訓條ニ於テ若支那ヨリ干涉スルトキハ公使ハ其
為ニ政府ノ命ヲ得サルヲ以テ之ヲ拒絕スベキ旨ヲ示サレタリ
但シ支那ヨリ已ニ啓文ヲ以テ我政府ニ掛合ヒタル上ハ公使ハ
訓條ニ針路ヲ履行シテ支那出張官ノ掛合ヲ辞スル為ニ前
陳ル條理ヲ心得居ルコト必要ナリトス但公使ハ單純ニ朝鮮
向テ我カ満足ノ償ヲ得ル止マリ朝鮮所屬論ニ涉リ支那出
張官ト目的外ノ萬藤ニ涉ルコトナキヲ要スベシ

若シ方ニ前陳ニ條ノ一ニ出ズンテ清國專ラ朝鮮ヲ庇蔭シ
我要求ヲ拒ム等ノ事アルハ是レ即チ朝鮮ノ黨與ニシテ

我國敵對之地ニ立ツモノト認ム外他ナカルベシ又朝鮮
ヨリ支那ヲ假リ口実トシテ以テ遷延ノ手段ニ出ツル共我ヨリ時日
ヲ期シテ速ニ決答ヲ要シ若シ返答ナキハ直ニ陸海軍ヲ
以テ強償ノ處分ニ取掛ル可シ

右外務卿出立後ノ情勢ニ付更ニ意見ヲ具陳シ請
閣裁候也

明治十五年八月七日

參議山縣有朋

太政大臣三條實美殿

61
56
四教

朝鮮、廢報シ聞ヤ一愕一恚一快
一憂黙セシト欲シテ黙止スル能ハス夫レ
彼國、皇邦ニ於ル同海隣境ニシテ輔
車相依ル國將來共ニ同海ノ振興ヲ
議ルヘキモノニシテ則チ彼、仁川開港談
判モ調整シ將ニ公館ヲ該地ニ結構サレ
シトスルノ今日ニシテ如此ノ廢報アラントハ
實ニ之レ一愕ノ至ナリ吾來彼國皇邦ニ
不敬ヲ加フルニニアラズ然ルモ彼亦一國

ニシテ未開人ニナレハコソ此ニテ度々仁政
ヲ垂レテレ悔懺シテ宥恕セラレシノミナ
ラス却テ彼ニ便益ヲ授ケル、一甚
カラス然ルヲ其我カ恩遇ヲ蒙ルノ厚ヲ
顧ミルコトナリ今日ハ如キ暴行ヲナシ
皇威ヲ汚カレ奉リシ其心術尤実ニ惡ム
ヘキ一恚ニ堪ヘサルナリ今也 皇邪
外國ト條約改正ノ今日ニ際シ彼レ如此キ
許スヘカウサルノ不禮ヲナスニ至ラハ断
然彼レカ無道ヲ鳴シ兵馬軍艦ヲ以テ

直々ニ八道三百二十九管ヲ蹂躪シ彼
レカ瞋味頑夢ヲ躑躑起レ我　　白王恩ノ
隆厚ナルヲ覺知セシメ而後々彼レカ安全
幸福ヲ保圖サルハコソ　皇耶今後ノ得
策ナラシ何ソ必ス猶豫レテ其是レヲ論
スルニ違アラシヤ固ヨリ彼レカ無道ナルハ
天地神明ノ知ル處ナリ況ンヤ今日内國
人心ノ腐敗スル勅モスレハ妖氣が凝リテ
將ニ解サラシトスルノ不祥ヲ兆スルナリ則々
此ノ妖氣凝結スルノ日ニ至ラハ將來ノ盛

事計り知へカラス益ハ皇威ヲ赫ク
ナラシメ大ニ宗祖ノ遺業ヲ安泰ナラシメ
ント欲セハ先ツ此ノ妖氣ヲ拂ハサルヘカラス
則チ此ノ妖氣ヲ拂フハ此ノ外征ト共ニ
拂ヒ則チ此ノ不祥ヲ撲滅スルハ此ノ外征
ト共ニ撲滅スヘリ則チ皇威ヲ赫クナラ
シメ宗祖ノ遺業ヲ安泰ナラシメント欲セ
ハ先ツ此ノ外征ニ若クニアラサルヘシ此レ實
ニ皇邦政畧上ノ一大緊要ニシテ暫ラク
モ怠ルヘカラスサルノ佳運ト云フヘキナリ如此

一 次外征シテ 皇威ヲ振興スルニ至ラ
ハ何ソ必ス外國條約改正ノ艱難ヲ説
クニ足ラシ何ソ必ス内国人心ノ妖氣ヲ
顧慮スルニ足ラシ嗟冀クハ斷然延韓
ニ決シ併セテ内国ノ惡氣ヲ外域ニ放散
セラルハコリ此レ則チ皇邦ノ一大快
ト云フヘキナリ然ルニ當今ノ世勢勅モ
スレハ空理ニ拘泥シ巧言其威力ヲ示
スヲ能ハス却テ皇威ヲ損殺スルノ
拙劣ニ陷ルヲ才カラス則チ今般朝鮮

果亂處分ノ如キモ亦悲クハ一時苟
安ノ廟策ニ出ルア_ニシ_テ臣等偏ニ
憂慮スル處ナリ然レ_モ閣下ノ聰明
ナル萬一其議ヲ提出スル者アリト虽
臣閣下断シ_テ其苟安策ヲ採_ラセ_ルハ
ル_ハナキハ臣等深ク信シ_テ疑ハサル處ナリ
仰冀クハ閣下非常ノ鋭断ヲ以_テ確乎
ト征韓ノ一議ニ決_スン_ハク貴威ヲ
犯シ敢_テ献言ス閣下幸ニ臣等カ愚衷
ヲ捨_リテ少貴考ニ及_スセ_ルハ_ハク_ハ臣

等一己ノ榮ニアウズ實ニ是レ

皇邦ノ幸焉也而拜謹言

福岡縣筑前國遠賀郡拂川村四
番地平正當時福井縣越前國大野郡
中保村五於高地齋藤孫九衛門方寄留

千々和護王



福岡縣筑前國福岡區福岡鉄砲町
四番地平正當時大阪府西區京町堀上通
四丁目岡本花方寓居

廣澤鐵郎



明治十五年八月五日

岩倉府公閣下

232300

3

昭和6年11月3日

本年七月廿三日朝鮮之賊我公使館を冠す亦
未通信ヲ諸新聞紙に掲げ又他に之ヲ聞かす
得ぬ政府已に軍艦ヲ發せしむる所聞罪
外求むる所なきハ竊に信ずる所なり於理
彼に固ヨリ謝罪を他に許さ雖未聞野蠻の頑
民未だ萬國の通誼ヲ知らず應省カラ負んキ
責ヲ以テ反テ罪ヲ正理に歸し我軍艦ヲ港口ニ
拒絶砲閉ヲ開テ血未乾カサル盟ヲ破ラズ皇威國
辱ノ所飛彈一撃彼力頑夢ヲ攪破スルハ忍ハ甘

ル能ハサレ所ナリ夫王師遠ク征キ干戈無心動
カハ其費途實ニ少カラサル也洗耳竊カ是我財
務ヲ顧ルニ近時頗ル多端國用餘アリヲ聞カス
而シテ又此一大事變ニ遭遇ス思ヒ一ニ此ニ至
レハ實ニ寢食ヲ安スル能ハス洗耳微力薄産本
意ノ千萬ヲ盡ス能ハス雖モ苟モ臣民タル者
傍觀坐視スルノ時ニ非ラズ聊カ以テ涓滴ノ微
忠ヲ奉シ開戦ノ宣告ヲ布カレ、アラハ金貳百
圓献金仕候間軍墮億万ノ一ニ加テ防ルニ得
ハ何ノ幸カ之ニ如カン且聞ク知ニ據レハ支那

ノ兵一萬有餘朝鮮京畿ニ在テ陰ニ勢力ヲ假シ
之レヲ慫慂セリト若果シテ然ラハ王師ノ征ス
ル所或ハ朝鮮ニ止マラス北京ニ向テ曲直
ヲ問フニ至ルモ未タ知ルヘカラス於是彼ノ辨髪
從順ナラスシテ卒ニ大兵ヲ構ヘ隣吏ヲ彈丸ニ
破リ國ノ安危ヲ嬰ケテ相争フノ日アルアラハ
我國民タ此者兵制ノ内外ヲ問ハス何ソ財産性
命ヲ顧ルノ暇アルヤ此時コソ實ニ洗耳カ國
家ニ報スルニ一時ニシテ財產ヲ罄シテ軍資ニ
投シ一身ヲ挺テ軍事ニ從カセト是レ固ヨリ

名 称	岩倉具視文書 西川本
標 題	電報類 (明治15年8~9月)

分	
類	364
番 号	

国立国会図書館

登 録 番 号	
------------------	--

十五年八月十三日午前十一時四十分發

太政官

三條殿

不ノ関

井上外務卿

官船買入方ハ手ノ届ク丈ケハ既ニ
買入レタリ渡邊ヲ金山ハ遣スト又
相場騰貴シ却テ宜ミカラス仍テ
夫シ丈ケノ丁ナラハ呼ヒ返ハサレテ宜ミ

十五年八月十三日午十二時四十五分癸

太政官

太政大臣殿

馬関

并上外務卿

官船買入料々ノ料ニ付渡邊ヲ呼ヒ返ヘ

サレタキ當ノ上申ハ取消ニ有リタシ就テハ

大藏省ヨリ二人出張ニ及ハス佐伯ヲ

呼ヒ返ヘサレテ宜シ

過刻差上及井上外務卿電報官船上
有之金少韓錢、誤譯之有之甚多
疎漏之也恐臨仕為此也態卜申
上差也

十五年八月十三日

內閣書院友

右大臣岩倉具視殿

外務省吉田へ

芝罘近傍登州ニ向ケ今朝解纜ノ清國
會社ノ氣船チントシ号ハカルトリツデ三十萬
噸積載セタリ同所ヨリ一千ノ兵ヲ朝鮮
ニ送ルズ其指令長官ハウーテヤンチナリ
尤兵士ノ數ハ風説ノ儘ナリ

八月十四日

上海ニテ品川

十五年八月十二日午後八時至午後

太政大臣府

根室ニテ

西ノ条議

書寫

歸京申達ニテ各様承玄長兄至急
根室ヘ差廻スベキ旨ニ付着船次方
後船ヘ条組歸京致スベシ

九月十日

吾國書成

卷之三

別我在多采實年大書記友有、電
信到耳水有坂海之一通石取敢可
通也

昭昭十女日行日云

外務部井上敬

北土金家房長親

九年十月年辰亥年子未

ハカ

井上

古木

二三日ノ内清輝經仁川月帰ハ養サスハハ
錦ニテ中ノ夕ハ明ク在帰スルモ性ハ人ニ

緯地之律條。統之於一。其旨。以
家。年。日。月。星。辰。之。理。而。通。之。四。時。
之。氣。而。教。之。民。也。
由。此。而。知。

由。家。書。記。之。

此。書。之。下。

由。家。之。一。而。知。之。理。也。

九月十八日 午後三時

井上外務大臣

ハカン

吉本

重剛、仁川より帰ル、仁社少時、系帰ル、系、

睦、
ニテ上申ス

リナナナナナ

下ノ関

内閣書記官

宮本

仁川より船乗りて何ノ館
知モナシ

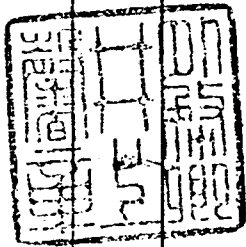
范房辨理公使及朝鮮使節
 只今馬關一到着々々電報有
 之り方考中申一進了也
 明治三十九年九月廿三日
 外務省井上馨

右大臣芳宮具視殿

本日及上中水電信より別紙行送抄付奉致
有り所々電所請文中取誤認之處有之取直
要、以上中一也

明治十五年八月廿一日

外務卿井上馨



大政大臣三條實美殿

列殘字、通五馬關、字、平書、記、
り、霞、林、五、い、皆、即、乃、在、回、也、
十五年九月十日

外、移、人、井、と、名、也、



古、大、五、名、具、視、殿、

232860
5
昭和6年4月3日

朱鑑拾五枚

九月十二日 午時十一時分 東京

井上 卯孫 氏

下系 吉木

井上 親 桑 込 帰 京 ノ 爲 ノ 上 海 郵 船 航 空 海 丸 神
戸 九 十 九 日 出 帆 東 京 行 け 即 刻 滞 留
ス ル 概 三 差 市 往 來 途 中 ア 夕 日 尤 回 入 明 船 云
我 等 ニ 対 じ 地 方 主 干 神 々 行 け

朱鑑拾五枚

明治十五年九月廿九日 御移住井上啓

石長安堂記

別紙品川總領事人々電報准令到達
出づ自所取致靜譯之上進達也

月廿

井山お留

三條寺跡に玉殿

出多電報中二三語を以て之を字
知立唯々明る中一付此等あり
此等より一電報也

ハハチニハナ

井ノ木

丁海

田川

ヒツトモシヨウ左ノ被差アリ

本修平ハ昨日南窓ウセエシ月

晴々天降^ル向ケ^ル鄂^サ櫓^ウセエスベシ

タレチヤウ^金ヨリ^解向ケ^ル所

リ^清兵ハ金^中一^大凡^ニ人ナリ^現今

中^他ニナシ

ピツトモシ^回右ノ兵^ウ支那^一解^釋ノ^誤ナシ

ニ^所スル^ニ清^政者^ノ解^釋トスル^所ハ^清正

外

王 勃 解 王 張 一 懇 請 二 出 ハ ナ リ ト 而 テ 回 奉

二 對 三 好 禮 ナ 三

川七

井ノ口

日為大友也

此乃電信局二三諸君所
多之雅意 同友中二三諸君
以多事之月也

ハリキチヨメ

上

井上外務

品川

ピットマシヨリ左ノ様告アリ

李鴻章ハ昨日ナ面系ラセタリ

唯日ハフシ海ト向テ呉淞^ウヲ出サヌスベシ

タシチヤウ登^ノナリヨリ解^ニ向テハシタリ

清兵ハ多^クナリ凡^ソ三千人ナリ現今ハ

他ニナシ

ピットマシ云々ノ云^フ支那^ノ解^ノ海^ニ

ニ入^ルスニ付清政府ノ解^ノ海^ニハ清國

夕

影

峯

王 朔 解 王ノ 語 ナリト
、 懇 請 ニ 出 ン ナリト 而 テ

日 本 ニ 對 シ 好 禮 ナリト

電伝寫之

九月廿五午後九時接子

五也卿

馬関

特別緊急

山口防長長

三十日午後一時半 仁川 來レノ迅報

船 二十日午後七時 馬関 着 三十日午前

條 約 整フ 委細ハ 歸京ノ上ニ 申ス

山口侍從長ヨリ別紙之通唯今書
信差越々間差進々也

丁丑年九月

當番

宮内書記官

右大臣殿

4

花房辨理以便及中山書院
刊紙之通電行三通到直了白子
有般事上知也

四學堂事如上

外務部上教

張五五張是張

井ノ下勢

下家

新書

和文、海老、仁川ヨリ海

本母上、白き海に對して書

十

分

イヨ

3
168
四枚

別紙の綴り方より草紙の白紙の綴り方

よりなるものと推定

よりなるものと推定

山崎素行書

本日在馬關宮本外務大臣記帳の時より以
別紙に文より包電報より之を朝鮮政府
より差越せる書翰三通より意を採取する者
を行政官儀として取り扱ふ事なり

明治十五年八月十九日

外務省代理

外務大臣補吉田清成

太政大臣三條實美殿

下矣宮本ヨリ外務省吉田電報

八月十五日

午前三時十分發

午後五時三十分着

書翰三通朝鮮ヨリ接到其才一ハ統理機
務漸門ヲ度シ禮曹ヲ再置セリトノ事其才
二ハ日本人ノ鬱對陵島ニ於テ樹木ヲ伐ルノ未タ
止マサルニ付苦情ヲ唱ヘリ又其才三書翰ハ大
意ハ左ノ如シ

日本ト朝鮮ト交際ハ三百年前ニ始テリ

(近來ハ)若干ノ港ヲ開ケリ而シテ我貿易
 ヲ為ス茲ニ六七年工藝技術モ亦大ニ進歩
 スルヲ得タリ然レモ朝鮮ノ兵士常ハ尚ホ旧
 習ヲ好ミテ知識ナシ故ニ其日本人ヲ見ルヤ
 常ニ畏懼危疑ノ念アリ又日本人ハ朝鮮
 人ヲ蔑視スルナリ其禍害モ亦大ナリト謂フ
 可シ吾輩惟フニ日本政府モ亦此事ヲ
 知ルナラン本月九日我人民俄ニ暴起シテ
 朝鮮人ヲ殺戮シ次テ公使館ヲ襲撃シ
 テ火ヲ放テリ朝鮮人ノ銃丸刀刃ニ斃ルハ

モノ多ク次日暴徒大臣ヲ傷害シ宮殿ニ
入テ王ヲ脅カシ王妃ハ薨ハムセリ大臣ハ擒セラル
花房氏ハ遁レテ濟物浦ニ至リ船ニ乗レリ同
氏何頃日本ニ歸リシヤ吾輩之ヲ知ラサリ
キ其後仁川府ニ於テ日本人六名我兵士ノ
為メ殺カル吾輩其屍及京城ニ於テ殺
害セラレタル日本人ノ屍ヲ埋葬セリ大院君
國政ヲ掌握ス我人民ハ其說諭ニ由テ靜
定セリ是レ我官民ノ一大幸ト謂フヘシ望ム
ラクハ向後我條約ヲ保維シ我回來ノ友誼

ヲ持續シ是ノ如クニシテ夫ノ禍害ヲ持シ好
佐果ヲ見ニテ

八月十五日

井上智之

下ノ果
奇中

井上智之ニヨリ内海ニ至リ海軍
部ニテ特ニ為スルコトヲ以テ
ニテ神ノ名アリテ詠イテコト

少母ト云フコトナキ

下ノ閣

井上外務卿

宮本

王妃の忌清通忠州に隠し居られ九月七日國内へ布告し喪服ヲ除カシ
山日本ニ来ルハ使節ハ金リヨリ及ヒ
ホウエイコウノ人正使ニテ「チンベ」ニヨク
副使タリ徐光範金玉均ハ随員ナリ
併シ之ハ表向ノ報知ニハアラス

十五年九月十六日午後九時二十分發

井上智之

下ノ集

あや

言武也此と名大井上殿御音お
ハ編ヨリ

九月五日午後十時

書本

多知
夕久
海命
垂ヲ
得夕
八月
五日

ホスキニ
氏ヲ
仁川
ニ於テ國主ヘ奉納シ
海邊節ノ人ヲ出

夕サレエフヲ求ム七日伴梅官イニセイ千ニ及ヒ高永壽コウ王イキ満

物浦ニ来ル而ノ
二 唐永王嘉イキ先ツ
 船ニ乗リ去ル
 演舌ス

高永喜
 東京へモ三度参り下存モ好ク禱ル人ナリ

素ヲ聞^ク化^スニノナリ然^ルニ大陰^ノ君^ニハレ其^ノ説^ヲ傳^フ

ル
ル
衆
ヒナキニアルス
併可驚異説
ニツキ
路ヲ
暗鐘

所中入ルシテ五魚神ハ八月八日逢巾ニ金剛經ニ

出宅を去る儀にハ同職ニ去リ移リタリヲエテ有魚号

ハ西遊記に於て再仁門地方一行久之ハ多岐夜房

一、遷ハス、右ノ復命書ハ、邦便

外 羽

下之關中本ヲ電報譯

高永喜氏ハ大院君ノ命ニ依テ茲ニ英艦フライングスニ歸

來リ左ノ如ク陳述セリ

予ニスギチエー 接待委員タリ政府ハ大院君ノ管理スル所
ト爲ル同君ハ守舊黨中ノ有名ノ人ナリシカ暴動以テ其
所爲全ク前ニ反セリ予ノ茲ニ來ルハ大院君ノ特命ニ依
テ其胸懷ヲ吐露シ且絶ヘテ密諒ナキヲ証セシカ爲ノナ
リ同君ハ暴徒ノ所業ヲ憤リ且單純ナル守舊主義
ノ愚ナルヲ覺リ今日ニ在テハ外交ヲ贊成ス又暴徒ノ手
ニ死ニタル公使館ノ人々ヲ痛悼シ之ヲ思フモ尚ホ心ヲ安
セス大院君慚愧シテ曰今ヤ外國交際ノ大ニ切要ナルヲ
曉リ又曰今ニ至ルマデモ花房氏ノ所在安否ヲ知ラス

同族ノ子ハ一日モ意ニ介セサルナシトテハ暴動ノ起
リシ以來其家ニ到ルヲ得常ニ同君ニ接シタルヲ以テ
以上言フ所ノ事ハ其確實ナルヲ証シ得ルナリ其業クハ
是下ヲカ言フ信スルアラシクテ是下花房氏ニ邂逅セハ
幸ニ左ノ言ヲ傳ヘヨ

大院君ノ心ヲ察シテ予カ且ニ述ル所ノ意味ヲ諒セラレ
ヨ同君ハ陸路ヲ信臺ヲ釜山浦ニ送りタレハ今頃ハ
公使ノ手ニ達セシナラシ新ノ如ク其輩ノ急送ニシテ同
君カ外國交際ノ爲メ漢口ヲ開クハ須要ナルヲ曉リ
昨日ノ夜ヲ憂スルヲ見ルハ余輩ノ憂々愕スル所ナリ
花房氏ニ於テ暴動ノ起ルハ大院君ニ在リト推量
スルモ實ニ尤ノ次ヲナレト述シテ左様ニ非ス其暴動ハ
全ク頑固ナルモ卒カ百姓ヲ煽動スルノ所爲ナリ暴

勃ノ目的ハ唯云率等カ不満ヲ懷ケル三人ノ長老
ヲ殺サントセシノミ然レモ其意ヲ達スルヲ甚スナリ
シヲ以テ兵率ハ終ニ日本公使館ヲ襲ヒ害ヲ他人
及ホセリ今日ニ至リテハ暴徒モ其災害ノ及ク波及セ
シヲ悔ユルモノ多シ

ホスキレ氏曰曰首謀ノ人救済何ナルヤ又其中誰人
縛ニ就キシヤ「コリーチ」答テ云フ未タ一人モ縛ニ就カス
何トナレハ暴徒以テ諸君ノ混亂ノ上ニ暴徒ハ全ク不
平ヲ懷ケルモ率ノミナレハ首謀ト名クヘキモノアラサ
レハナリ日本公使カ其意ニ其本國ニ著セシ「コリーチ」
其意ノ至ナリ大院君ニ於テモ同様欣喜ニ堪ヘサルヘシ
云々以上ハ「中」ニ於テホスキレ氏ト「コリーチ」氏トノ
對話ナリ其後ホスキレ氏ハ滿物浦ニ上陸シ接符委

ナリトテ左ノ云ク反復陳述セリ即チ大院君ハ係ニ意
向ヲ轉シ聞進ヲ可トスルヲ以テ日本ト一層敦厚ノ
交誼ヲ保維シ且日本公使ノ速ニ京城ニ歸任ヲ云々
ヲ冀望セラルナリ云々

辛巳百八十二年八月十七日午後七時十分發

同 十八日午お一時三十分着

下ノ要

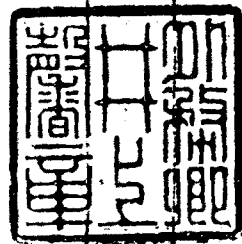
中本

外務省

在馬關電本外務大臣記及于昨十七日附郵
電報及英船及魚船一艦長ホスキニ氏韓地於テ
彼國船待番及トノ對話外及于之通曉船信
ヲ以中越決問及及及中一及也

明治三十二年八月十八日

外務大臣 井上 馨



太政大臣三條實美殿

王到一正日暗号一廣信院
出本少官如美作山如也

十丑年九月十七日

外務省井王智

右方如岩倉具親殿

十五年八月十三日午後十時四十分散

午後一時三十分散

午後五時

午後六時

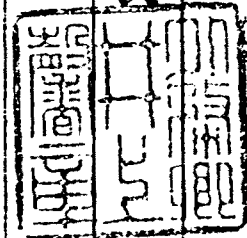
午後七時

午後八時

韓紗買入才ハ子ノ属リ丈ヶハ已ニ
買入タリ渡辺ヲ金山ハ無スト又
お坊様丈ニ却テ宜ニカラス何テ
夫丈ヶノ事ナラハ事ニ返ハサレテ宜ニ

在浦願方之智乃可務方之ノ時鐘電位保
之通及上申所也

明治十五年八月二十日 外務卿升之智



大政大臣三條實美殿

東京外務省吉田、

田邊ヲ左ノ電報アリ朝鮮ヲ要ニ桑ニ總理
衙門ヲ公使ヲ爲シタリ朝鮮ハ清國ノ屬邦
ナルニヨリ之ヲ保護スルハ清國ノ本務ナリトノ
口實ニテ強件ヲ編理スル爲メ互ニ陸海軍ヲ
派セリ且日本在留清國公使ニ以自電報セリ
トアリ強公使ヨリ同格ノ倭ヲ外務省ニ通知
シタルトト考ヘラル太ニ對シ如何格ノ回答アリ
リシヤ外務省、回答ノ上函ヲ致シ度シ

八月十日

上海ニ於テ

品川

支那實業の発展の電報

英國軍艦十隻が鮮一泊の昨日高知に上陸した

八月二十日午後九時二十分

日清戦役十一時三十分

海軍

支那

支田

重校列傳卷之五
十卷

崇文閣大印

十五年八月十日午十二時至午四時

午後三時

太政官

馬関

多政大臣

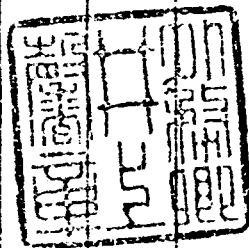
井上外務

韓鐵買入云々ノ件
ハス佐伯ヲ呼ヒ返ハサシテ直ニ
就テハ大蔵省ヨリ二人出張ニ及
シサレシキ事ト申ハ所留アリト
ハス佐伯ヲ呼ヒ返ハサシテ直ニ

今敕明法丸下之向一着能可音官本外務省
記官竹添外務省書記長小沢武通電民三通
副送外務省書記長小沢武通

以爲十五年八月一日

外務卿井上馨爲



大政大臣三條公武爲

壬午年八月二十七日午三時五十分至生於四時二十分著

下ノ子

井ノ口新堀

吉本

十六日ノお花房は似ハ京城ニ著セリ朝鮮政府ハ
城内ニ旅館ヲ設ケテ亭ニ待遇セリ城内ノ人心ニ極
メテ平穩ナリ

十五年八月廿一日午未二時至京
嘉年未二時至京著

井上御所

下ノ書

書本

明治丸還ル竹島系紐来ル明船
シ地出帆東京へ向ル

在下ノ關竹添ヨリノ電信譯文

大院君ヨリ使者ヲ以テ暫ク漢陽府ニ來ルヲ見合セ吳レ
ヨト屢々花房ニ請願セシカトモ花房ハ右ニ關セス進
ミ入タリ大院君ハ特ニ花房ノ爲メニ城内ニ家ヲ新築
シテ最モ懇切ニ待遇ス花房ヨリ二日前馬建忠ハ軍
艦三隻ヲ携ヘテ仁川灣ニ入リタリ而シテ馬建忠ト花
房ハ各他ノ軍艦ニ行キ互ニ通信セリ拙者ハ花房ヨ
リ二日後レテ入港シ十五日仁川府ニテ花房ト面會
シ船ニテ還リ余ハ馬建忠ト面開ノ筆談ナセシカ馬
建忠ハ朝鮮ヘ對スル我處置ノ法ニ付別段懸念スル
トコロナク唯日本ヘ爲シタル暴動ニ付謝罪スルヲ
朝鮮ヘ勸メ且又我要求ノ過當ナラサランヲ冀望
セリ十二日馬建忠ハ軍艦一隻ヲ天津ヘ返シ自分

護衛ノ為メ李鴻章ノ護衛兵ヲ求メタリ朝鮮ハ
馬建忠ノ軍艦ヘ絶ヘス往復シ大院君ハ馬建忠
ヘ漢陽府ヘ来ランヲ促ス一兩面ナレトモ彼ハ十
八日ノ朝マテハ上陸セサリシ其故ハ護衛兵ノ来
ラサリシカ為メナリ

一千八百八十二年八月二十一日

午前四時十五分
午前五時四十分 著

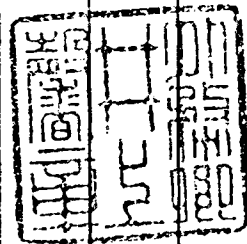
馬關

竹添

井上 殿

高麗國柳宗全權公使等
於本月十八日所發成電
修譯文之通中越等
及上申等也
明治二十五年八月二十一日

外務卿井上馨



太政大臣三條實美殿

柳京子傳ノ電報譯

支那國政府ハ邊境ノ視察ニシテ派遣セサルモノハ此
唯廿五ノ所ハ該國駐テ清國人紹介ヲ以テ朝鮮ト歸
結セトスル事約ノ一ハ今回結結ノ事以テ之ヲ延引
スレトノナリ

一子京子二年八月十六日午後十二時四十分薨

柳京

井上

232393

1-7

昭和6年11月0日

別紙、通馬、突出、張、客、年、書、記、友、分
電、報、列、本、自、及、水、四、介、心、志
暗、号、廣、行、詳、細、ハ、後、刻
可、一、可、多、如、外、付、各、P、一、通、下、也

丁丑年九月十七日

外務省、井上、智、良

右大臣、岩倉、具、視、殿

九月十七日 有上申

お尋ね、下ノ条 本年

九月十七日午後六時四十分

和歌浦丸 仁川ヨリ帰ル

同日午後七時十分

井上毅、二三日ノ内帰ル云々 船中、乗客

此地ニ留マラズ、和歌浦丸ニ神戸、

神戸、

九月十七日午後七時十分

王紀、清道忠州、隠し居り九月

國內ノ布告ニ喪服ヲ除カシ日本ニ来ルハ

キ使節ハ「キリヨウ」及「ホクエー」

ニ「チンビン」ヨク、副使ナリ、徐光範、金三

負ナリ併シ之ニ、表向、阪新、アラス

九月十七日午後七時十分

王紀、只今ノ看ス井上毅、海に、

井上毅、乗客、上海、船中、乗客、

十、乗客、乗客、乗客、乗客、

和歌浦丸、乗客、乗客、乗客、

品川総領事ヨリノ来電譯

田邊ヨリ左ノ如ク電報アリ朝鮮へ派遣セラレタル馬建忠及
師長替丁汝昌兩氏ハ全權ヲ帶ヒス又ハ欽差ノ名義ヲ有セス
島邨ヨリ去ル九日癸ノ報告ハ唯風説ノ如ク思ハル

一千八百八十二年八月十六日午前一時五十分癸同日午後三時接受

上海於テ

品川

吉田殿

232308

2-21

昭和六年八月二日

高平臨時代理公使ヨリ、電報ニ

モルガニ氏、上院外國、言ニ據ハ朝知

付シタルカ議院開會前ニ之ヲ討

スル、時間ヲ然シ次回ノ開會ニ

討議ニ涉ルベシトナリ

一千八百八十二年八月十四日午後八時

華盛頓府

高

外務省

外務大輔吉田清成殿 米公使ヒンハム

以奎編強敵之陳ハ過般井之上閣下ヲ以テ朝鮮
ノ葛藤及同國ニ於ル日本之役館製製ノ件。之ニ對
スル貴政府ノ措之及同國ニ派遣サレタル諸將ハ單ニ
日本之役及居留日本人ノ保護ヲ專務トスベク此ニ
テ各端ヲ啟キ著ルハ結果ハ人衆ノ動搖ヲ多ク分利
令ヲ受タル趣強ニ其國を成就スルニ付テ節拙者ヲ
囑答トシテ貴政府ハ其意ニ応スルニ平如ノ政策ヲ
以テセラレタルハ至極満足ニ存スル方同閣下ニ中進ニ係
モ有之者多シ拙者又貴政府右政策ヲ執行ニ至ニ固ク
以政策ヲ維持セラルヘキ事實ヲ敬政府ハ之申致スルハ
其為度心ハ中述ス

本月二日附井上閣下参議中府依頼之趣に從て拙
者より本國へ出帆ノ郵船に托し再び該事件に關スル
一切ノ事實ト該中府及政府ノ政策ノ目下實情中
ナル趣トヲ敝政府へ上申可致み拙者偏り望み付處ノ
事件悉皆貴政府ノ満足に歸じ及て日韓ノ親和
ヲ聯統セシムル極ノ結果ヲ生セシメテ

本月十一日貴國ヲ以テ近頃各衆國ト朝鮮トノ間ニ
訂結シタル條約ノ批准済否ニ至テハ何れも参議中
ニ明言致意致意

千八百九十二年八月十六日

品川港領事ヨリノ來電譯

芝罘ヨリ得タル報知ニ依ルハ馬建忠ヲハテニトルニ隻ハ其二

本月五日芝罘ヨリ朝鮮へ向テ出帆シテ「カシ」号ハ本

月十二日芝罘ヲ發セリトナリナリ當地清國官

吏ノ云フ所ニヨレハ南方艦隊ヨリハ未タ軍艦ヲ

用意整ハス尤一隻ハ南京ニ在リ一隻ハ修復

中ナリ云々

一千八百九十二年八月十六日午前八時ハ發 同日午前七時接受

品川港

品川港

品川

品川総領事ヨリノ電報譯

島邨ヨリ左ノ如ク電報セリ汽船

海榮

エーシニ号建築材料及食料ヲ

積ミ今朝

全川

テニキ走レヨリ

朝鮮ノ地名歟

クニキヨウヘ向ケ當地ヲ發セリ

又ク

江表

ハイ号モ同品ヲ積ミ込ニ申ニテ本日午後當地ヲ出帆ス

ハ水師提督

丁汝昌

ニ氏事情報告ノ為ノ去ル月曜日朝鮮ヨリ

歸著セリ同氏ハ明日再ニ同地ヘ赴クヘシ且ツ云フ李鴻章ハ

本月十八日出發ノ天津ヘ返ルヘシ云々

一千八百九十二年八月十六日午後四時十分發日十六日午後十時十五分著

上海

品川

吉田殿

八月廿日海軍御届

八月廿日 高崎 三時 着 仁川港金剛艦 仁礼海軍少將

當艦九日 進艦十一日 明治九十二年 比敵艦二十日

清輝艦十六日 當港着 公使十六日 本官及

高嶋 十七日 入京 支那軍艦三艘入港

一艘十二日出港 不日二艘 陸軍十八日

海軍御届中

追二返鯨艦 昨廿日午後七時横須 鑑行 向六出港

品川總領事館新聞

田邊より左ノ如ク電報アリ朝鮮事件ニ關シ日本
在留清國公使ハ御回答ノ趣ヲ御通知ナリタル
貴電信ハ月十四日附ニテ品川ヲ經テ接手セリ松
省ハ之ヲ同ニ意味ニテ直チニ總理衙門ニ通知セリ
十九日彼ヨリ回答アリ云フ各政府自カテ處
辦スル所アルカ故ニ今回ノ場合ニ於ル清國政府
ノ處置ハ日本ト更ニ關係スルヲナシトノナリ
一千八百八十二年八月廿三日發

上海

士田殿

各國公使宛

外務卿井上 馨

以書翰致啟上候陳ハ頃日在朝鮮我公使館襲撃ノ儀ニ關シ大要ハ既ニ御承知可有之候得共尚左ノ件々御報知致シ并ニ我政府ニ於テ既ニ舉行シ或ハ目下計畫中ノ處置ニ關シ左ニ陳述致シ候

御心得ノ為メ封入致シ候別紙電報ノ譯文寫ニ就テ御觀察可相成通り右襲撃ハ甚々重大ノ件ニ有之花房氏カ傳聞シタル趣ノ報ヲシテ果シテ信ナラシメハ右襲撃ハ單ニ我公使館ヲ目的トスルノミナラス亦外交ヲ可トスル者并ニ王宮ヘモ敵對シタル政黨ノ暴動ノ如キ狀有之右ハ諸國一般ノ利害ニ關係スル事件タルヲ疑ヲ容レス候然シナカラ我政府ニ達シタル文ケノ報告

テハ未タ實際ノ事實ヲ確知スルニ足ラス候得共實ニ
如是事變ノ警報曾テ我公使館ヘモ朝鮮政府ヘモ是
ハ推察達セサル様相見タルハ奇異ノ事ニ有之候
設令將來ニ於テ發見スヘキ談事件ノ起因ハ果ノ何
等ノモノタルニ拘ハラス我公使及其僚屬一行ハ即チ
此激烈且暴戾ナル襲撃ノ目標タリシト固ヨリ明白
ニシテ逆徒ハ當ニ單純ナル烏合ノ乱民ノミナラス該
一行カ引退テ海岸ニ達スルヤ更ニ兵士ノ爲メニ攻撃
サレタリ故ニ不得已海上ヘ逃カル、ニ至リ候
然ルニ公使ノ一行カ小艇ニ搭シテ歸國ノ途次恰モ好
シ英國ノ測量船フライング、フィツレユ號ニ邂逅シ幸ニ同
船ノ助力ニ因テ危急ノ場合ヲ逃レ遂ニ長寄ヘ達スル
ニ至リ候

此危難ヲ免カレタル人員ノ外更ニ堀本中尉外九名ノ
日本人ノ生死相分ラサルカ故ニ此九人ノ危難及ヒ朝
鮮諸港ノ居留日本人ノ安危ヲ慮リ我政府ハ即時
ニ軍艦三隻ヲ朝鮮ニ發遣スルヲ決定シ右ハ既ニ出
發シタリ又花房公使モ此重大ナル暴擧ノ辨明ヲ朝鮮
政府ニ求メ且ツハ一般ニ我國人民ノ利益ヲ保護センカ
爲メ朝鮮京城へ還ルヘキ命令ヲ受ケ候我政府ハ同公
使及ヒ一般ニ居留日本人ヲ保護スル爲メ三百名許ノ兵
隊ヲ發遣セントス此處置タル我政府ニ於テ目下ノ形勢
ニ於テ尤モ急務ナリト思惟致シ候談小兵隊並ニ軍艦
ノ兩將ハ孰レモ決シテ戦闘若クハ粗暴ノ處置ヲ爲サ
スレテ單ニ日本公使並ニ居留日本人ヲ保護スルヲニ
従事シ又平穩ナル處置ヲ行フ道ニ背カスレテ斯ク痛

ク侮辱サレタル我帝國ノ體面ヲ維持スヘシトノ特別ノ訓令ヲ帶ヒタルニ有之候

這回ノ事件ニ關スル我政府ノ意向ハ全ク純然クル平和主義ニ在ルヲ閣下於テ充分御認定アラニテ拙者切望致シ候軍艦及ヒ兵隊派遣ノ一タル假令少數タルニモ拘ラス動モスレハ其實ニ過クルカ如キ評ヲ受クルモ計リ難クシテ之カ爲メニ事實ヲ充分ニ承知セサル地ニ於テハ我政府ノ旨趣ヲ誤解スルニ至ルアルヘキハ拙者ノ固ヨリ覺悟スル所ニ有之候右ノ次第ニ付閣下於テハ此昏面ノ趣ヲ可成速ニ貴政府ヘ御通知アラニテ希望致シ候此外閣下於テ御希望相成ルキ報告ハ拙者力及フ丈ケハ欣然進呈致ス可ク候此段得貴意候敬具

千八百八十二年八月二日

在下ノ關竹添ヨリノ電信譯文

大院君ヨリ使者ヲ以テ暫ク漢陽府ニ來ルヲ見セ
ヨト屢々花房ニ請願セシカトモ花房ハ右
入タリト君ハ特ニ花房ノ爲メニ城郭ニ家ヲ新築
最モ懇切ニ父遇ス花房ヨリ二日ハ馬建忠ハ軍
艦三隻ヲ携ヘテ仁川ニ入リタリハ馬建忠ト花
房ハ各他ノ軍艦上ニテモ行キテ通信アリ拙者ハ花房ヨ
リ二日後レテ入港シ十五日ハ川府ニテ花房ト面會
シ船ニテ還リ余ハ馬建忠西ノ筆談ナシカ馬
建忠ハ朝鮮ヘ對スル我父置ノフニ付別段懸念スル
トコロナク唯日本ヘ爲レタル暴動ニ付謝罪スルヲ
朝鮮ヘ勸メ且又ニ要求ノ過當ナラサニテ冀望
セリ十二日馬建忠ハ軍艦一隻ヲ天津ヘ返シ自今

護衛ノ為メ李鴻章ノ護衛兵ヲ求メタリ朝鮮ハ
馬建忠ノ軍艦ヘ絶ヘス往復シ大院君ハ馬建忠
ヘ漢陽府ヘ来ランヲ^{強テ}促ス^テ兩面ナレトモ彼ハ十
八日ノ朝マテハ上陸セサリシ其故ハ護衛兵ノ来
ラサリシカ為メナリ

一千八百八十二年八月二十一日

午前四時十五分癸
午前五時四十分著

馬関

竹 添

井上 殿

明治十五年八月廿一日午前三時五十分
馬関發四時十分到達電報ノ記

十六日ノ夜花房公使ハ京城ニ著セリ朝
鮮政府ハ城内ニ旅館ヲ設ケ丁寧ニ待
遇セリ城内ノ人心モ極テ平穩ナリ

馬関

井上外務卿殿

宮本小一

在馬桑也本ヲノ電信譯

花房ノ報告ニ中山ノ味ニ依リ左ノ事ヲ得タリ
八月二十日花房國王ニ福シ我政府ノ要求ヲ持ケ然
ル後全權ヲ帶ヒタル談判者タル撰筆アラセテラ
望メリ彼レノ答ニ領議政或ハ禮曹判書ヲ撰筆ス
（シトノ）ナリ領議政ハ高淳朴ニテ昨年我國ニ来
リタル高永喜ノ父ナリ其後花房ハ大院君ノ宅ニ
於テ同君ニ面會シ少シク議論アリ花房ハ國王ニ福
セシ片三日間ニ確ナル回答アラシテヲ要求シタリ國王ハ
之ヲ承諾シタリシカ只書牒ノ往復ノミニテ且ツ領議
政ノ代リニ特別委負ノミ来リ王妃ノ葬式有件ヲ
口實トシ萬彙ノ抄取ヲ妨ケタリ花房ハ今ノ速カ

ニ成就セサルヲ觀テ漢陽府ヲ去リ仁川ニテ行キ近
藤ヲ漢陽府ニ殘セリ朝鮮政府ハ數度花房ノ辭
去ヲ止メタレトモ之ヲ聞カス此時ニ當リ馬建忠ハ
花房ヲ追テ漢陽府ヨリ來リ清國政府於テ停調ノ
意アルヲ通シ且ツ又何トカ大院君ヲ處置スヘキ
ニ付キ數日間ノ猶豫ヲ與ヘ彼等ヲレテ相當ノ談判
委員ヲ得セシメシヲ言出テタレトモ花房ハ閣下ノ
訓令ヲ体シ馬氏ノ停調ヲ引受ケサリシガ少シク
之ヲ試ルヲ許ス可キ旨ノ内々承諾シタルト見ユ
而シテ品川丸ニ歸ル使節トシテ李雄元副使トシテ
金宏集仁川府ニ來ル然レトモ李雄元ハ病氣ニ付
金宏集ノミ品川丸ニ來レルヲ以テ何事モ決定セス
花房ハ上陸シテ李雄元ニ面會シ其後間モナク

事ヲ諾署セリ此時井上毅迅鯨艦ニテ到着ス談判
ハ大約二日間ヲ費ヤシ三十日仁川府ニ於テ調印ニ双
方ノ批准ヲ二ヶ月間ニ交換スルヲ約セリ此ニ於テ
馬建忠モ合衆國モ停調ヲ成サス思フニ馬建忠ハ
密ニ我ヲ幫助セリ大院君ヲ連レ行事柄ヲ觀ヨ彼
レヲ噤カシ出セリ曰ク王妃ハ未タ死セスレテ何處一リ
隱匿シ居ルトノヲナリ金玉均ハ品川丸ニ在ルト見ユ
同人ハ漢陽府ニ於テ大院君ニ面會シタリト云フ
船中并ニ陸兵ノ間ニ脚氣流行シ之ヲ病ニテ死スル
モノアリ

九月三日 午前十二時發
午後一時半着

下ノ綸

宮本

井上外務卿

九月二日午後九時至同方同々時三十分着

井上外務卿 中山ヲ經テ花房

王ハ今月二十日ニ謁見ヲ與ヘタリ拙者ハ要求
書ヲ呈セシニ王ハ宰相ニ本事件ヲ委任スルト云ヘリ
三日間回答ヲ待テシガ其翌日宰相ハ書來ヲ贈リ
彼ハ新ニ王ヨリ他出スルノ命令ヲ得タ云ヘリ依テ事
件大ニ等閑ニ附シ協議ニ及フノ望更ニナカリシ依
テ書ヲ國王ニ贈リ京城ヲ辭去セリ其途上一書來
來リタシトモ唯先キノ書翰ノ返事ナリキ既ニ濟物
浦ニ到着スルニ及ンテ猶更ニ一ノ書來來リ彼方
ニ於テハ出張シテ事件ヲ協議スルヲ好ムノ意ヲ
記載セリ拙者之ニ回答スルニ二日間辭去ヲ猶豫
スルヲ以テセリ然ル處全權委員リウセン柳璣同副

委員金宏集来り談判ヲ閉キ遂ニ三十日ニ於テ
大満足ニ至リ條約ヲ締結セリ

九月二日午後十一時馬関参

丹上

中山ヲ經テ

花房

馬達忠ハ去月廿六日京城ニ入りテ大院君ヲ諭シ
テ漢陽ニ在ル支那ノ軍艦ニ来ラシメタリテ汝昌支
那ノ提督ハ同日大院君ヲ連シ天津ヘ向テ出帆シ
リ馬達忠ハ京城ノ諸方ニ布告ヲ張リテ曰ク
暴動ニハ主謀者ナキカ如シ乍併公衆皆大院君
能ク之ヲ知ルト言フ故ニ支那皇帝ハ若暴動ニ
関シ大院君ニ北京ニ於テ査問スベシ併ニ彼ノ身
体ニハ害ヲ加ル如キハナカルベシ

九月二十午後十二時半馬關發

紅紙

中山書院

日韓兩國間約定ノ主要点ノ如シ

第一 旨向ニ叛徒ヲ逮捕シ首謀者嚴

罰^{アツシク}加^フベシ右審判中我人民之

立合^フベシ約^若定^ルノ期限内ニ逮捕セラレサ

ル時我ニ於テ其處罰^四リ為スベシ

第二 被害者我人民ニ相當ノ禮式ヲ以テ埋

葬セラレベシ

第三 被害者家族ノ生計ヲ扶持スルノ

五万円ヲ拂フベシ

第四 朝鮮政府ハ朝鮮人ノ為メニ生レタル

損害并費用ヲ賠償スル爲メ朝鮮改
府ハ五十万圓ヲ毎年十萬圓ノ年賦ニ
テ拂フベシ

蓋 我ニ使館修設ノ爲メ我兵買ヲ屯駐セ
シムベシ朝鮮政府ハ兵營ノ建築并修
繕ノ費用ヲ負擔スベシ我兵買ハ規律ヲ
遵守スベシ一々年経過ノ後ハ我ニ使ノ
見計ニ依テ兵買ヲ引拂フツルベシ

第六 朝鮮政府ハ國王ヨリ書翰ヲ以テ謝
派ノ爲メ特命ノ使節ヲ派スベシ

又兩國交通ノ爲メ左ニ通り約定ス
第一 元山津東萊府仁川府ノ條約規定
ハ今後朝鮮里數五十里タルベシ

右批准濟二年ノ後ハ之ヲ朝鮮里數、百
里ニ擴ムベシ而メ一年ノ後楊華津ヲ貿
易ノ爲メニ開クベシ

オニハ使領事并其屬員及ビ其家族ハ禮曹
ヨリ發スル旅券ヲ携帶スレバ内地ニ旅行ス
自由クルベシ各地方官ハ旅券ヲ檢査シ
旅人ヲ護送スベシ

右二條ノ約定批准ハ東京ニ於テ二十月内ニ
交換スベシ

吉田玄輔

岩倉左大臣

九月十六日午後八時四十分發

井上外務大臣

ハカニ

カモ木

本月七日花房ハ漢陽府ニ入リ朝鮮政府ト充分談
話ノ末九名ノ犯罪人ヲ捕縛セシメリ内四名ハ堀本ノ
身及ヒ公使館ニ對シ案ヲ加ヘクル至謀者ト定メラレ
テ死罪ニ處セラレタリ一名ハ病死シ三名ノ後犯者ハ
流罪ニ處セラレタリお一名ハ王屯ニ對スル罪人ナレバ
余ニ於テ何ノ關係ナキモノナリ今一名ハ余モ同意シテ
死罪ト定メタリ

本月十一日ボカカンノ前ニテ余カ吏モ陪席シ朝鮮
國法ニ照シ罰シタリハ月二十八日ニ於テ朝鮮政府ハ
傳々ノ手ヲ借り十一名ノ罪人ヲ捕縛シテ之ヲ罰シタ
リ其内六名ハ公使館ヲ襲ヒ且花房其他ヲ仁川

マテ追クタルモノナリ依テ亦ニ對シタル罪人ハ合計
十二名ナリ近日井ノ穀・漢陽府ヲ出立ス詳細同
人ヲ漢陽府ナル

九月十六日午後九時十分

井上

花房

拙者よりノ最後ノ電報ニ述ハタル如ク已ニ陽子
リト信シ上暴徒ヲ探捕シ之ヲ罰スルヲ止メ
タリ併ニ外國人トノ交誼ヲ倍ス親交ナラシメ且
蠻夷侵入云々ノ碑ヲ取除クヲ全國中ニ厳令
スヘキヲ忠告セリト忠告ハ遠ラズ採用サルヘクト
思ハル

丁亥年九月十六日午後九時四十分

井上

吉本

本月三日附ノ臺船ヲ以テ島建忠ハ罪人ヲ捕縛ス
ル及僕金ノ一條ヲ易クニ且輕クセシテ内家
ハ花房ハ馬氏ト謀刺セリ馬氏ハ四日ニ天津
向ケ去リタリ再ニ陸航スルヤ否不ク趙寧夏及
金宏集馬氏ト同行セリ

九月十七日午前の時十分

井上

吉本

先刻送タル氷通ノ電信ノ外何モ格別ナル新聞
ナシ特派員節々々々近日花房ト共ニ来ラン

名 称	岩倉具視文書 西川本
標 題	清国公使館附 尾山少佐 報告書 その他

分 類 番 号	
	365

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

三
清國公使館附提山陸軍少佐報告

清國公使館附提山陸軍少佐報告
書俱回覽作也

明治三十四年八月十一日

山縣參議

右大臣殿

右大臣殿

右大臣殿

右大臣殿

右大臣殿

林方孝誦殿

大山孝誦殿

川村孝誦殿

福岡孝誦殿

佐々木孝誦殿

明治十五年七月廿二日清國公使館附陸軍歩
兵少佐梶山弼介報告

探聞スルニ頃日新ニ福州ニ渡航シ夫ヨリ北京ニ来リシ琉
球ノ使節一名アリテ既ニ昨年来滯京ノ同國人等ト一
同過日總理衙門ニ至リ本國ノ使節ニ曰ニ復元様ニ々ノ款
件ニ及ヒシ如堂計該衙門ノ大臣頗ル怒氣ヲ含ミ新来ノ使
臣ニ諭スニ汝等熱心中華ヲ慕フノ真意更ニナリ口實相及シ
甚ク所為惡シヘシ今般態々渡航セシモ汝等ノ意ニ出ラズ全
日本ノ内意ヲ受ケナラン一言ニ之ノ款願聞リ能ク又速ニ歸國スヘシ
ト彼使臣モ其ノ意外ニ出ラ不得止ニ意退ヤ當時ハ北京天津

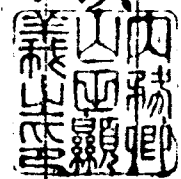
ノ間ニ隱然周旋奔走たり又ノ昨年来滯京ノ同國人等ニ懇
諭ニ緩ニ清國ノ處置スルヲ待ツニシト今ニ外城ノ西河沿市街ニ或
一家ヲ借り潜居シ費用ハ悉皆代理衙門ヨリ給與ス同國人ニシ
テ同事ヲ歎訴スル此ノ如ク軒重アハ難解也亦ハ有之想像シ
ハテ推ス時ハ新来ノ使臣ヲ激烈ノ一言ヲ以テ思ハシメハ真ニ同國
ヲ疑フノ意ニ非カシテ全ク同國人心ヲ一致ニ倍ニ清國ヲ慕フノ意
ヲ鞏固ナラシメント一策ナルニ又聞ノ所ニ因レハ南洋大臣左福
建巡撫岑ノ兩氏ハ球案ノ一事ニ付過日更ニ上奏セシト大
意ハ球案ハ到底尋常ノ談判ヲ以テ疏地ヲ曰ニ復ニ清及ニ同
國人ノ意ヲ満足セシムル決シテ行レ難シ是非此ノ局ハ兵力ニ

作フルノ覚悟ニテ更ニ談ヲ開ケリ最上策トス云々頗ル迫逼激烈ノ
奏議ナリト球案ノ如キハ清國政府ノ最モ心頭ハ掛ケ常ニ忘レサ
ル所ニシテ我ヲ慰望敵視スル益甚シ清國今頻ニ兵力ヲ練
磨スル欧米各國ニ對シ邊防ヲ守備スルニ非ズ獨リ我ニ對シ
試ムル内意ト云テ可ナリ歲月ヲ積ムニ從ヒ球案ノ好結果ヲ
見ニ難ク可シ故ニ我ニ於テ愈々兵力ヲ養ヒ寸隙モ忽ニシ彼
ヲ侮ルノ時ニ非ザル也

朝鮮事件 月課急者 漢官 情況 別
紙通 採知 多身 供電 覽見 多也

十五年八月十九日

內務卿 山田顯義



三條太政大臣殿

別紙檄文ハ去ル七日附テ以テ群馬外宮部裏新藤生雄
鎌原軍藏岡山外竹内西志深井卓尔ノ五名ヨリ在東京群
馬外長坂八郎岡照山峻三滋賀外藤公治札幌縣本多新ノ
四名当ニ郵便送致セシ者ニシテ過ル五日當ニ外島本仲
道岡山外竹内西志自由党幹事宮部裏ノ三名上州外本
八入洛ニ至越シ候間其際岡國高崎ニ立寄り岡國ノ同志
者則テ奇藤壬生雄鎌原軍藏ト懇談ノ上右決定セシ者ト
推測致事尚又檄文草案ノ添書ニ有テ其主意ハ廣ク岡
志ヲ募集シ大至急出版ニ努メ各地ノ有志ニ配賦有テ
方ニ集會ノ上宜ク修成ノ上此檄有テ数年間ノ宿
志ヲ果スノ好機會ナレハ此時機ヲ失シテ何レノ日カ期
セシ宜ク周知アル云々ノ書面ニ添書致事起事者ノ心意

ヲ案スルニ名ヲ征韓ニ託シ其実外患に際シ吾政府ニ当
ルノ精神ト想像仕ル

一豫ヲ及上申置ル義勇虎ハ尚ホ一層精進ノ人負則テ大
分外笹部薩雄新陽外赤沢常宕石川外坪内鉄太郎岡島木
鋪次郎滋賀外藤公治高杉外雪那氏群馬外長坂ハ郎ノ比
若昨九日浅草松葉町曹源寺(明義社)ニ於テ密會ヲ開キ今
日韓國事件ニ付名心騰ヲ吐露シ將來ノ目的ヲ定メ其右
々ノ意見大同小異ニテ何レモ此極に際シ名ヲ征韓ニ託
シ同志ヲ募集シ充分ノ勢力ヲ得直クニ目的ヲ達シ外患
ノ如何ニカ、ワラス吾政府ヲ顛覆セシ若シ事畢清土ノ
關係ニ及ビ大事也至ル上ニ政府顛覆ノ後ニ非スニハ外
患ニ着手スルハ決シテヤカニテ議決致候尚今十日
前會議ノ場可曹源寺ニ於テ一般ノ同志ヲ集メ將來ノ手

殿ヲ議スルニ決定シ昨日ハ散解致候
右近況及上申候也

八月十日

別紙撒文ハ新ナ紙上ニモ散見セリ以テ畧ス

征韓党仮規則

第一条 吾党ハ今回朝鮮ノ変事ニ由リテ團結セシモノ
ニシテ断然開戦ヲ旨義トス

第二条 吾党出征ノ進退緩急ハ政府ノ命ヲ待ツモノト
ス

第三条 吾党ハ便軍ノ爲メ東京大坂両所ニ事務仮リ本
部ト定メ委員五名ヲ置ク

第四条 地方ノ便宜ニ依リ二十名以上ヲ以テ一團結ト
ス

第五条 談事件ハ尤モ至急ヲ要ス小虽氏遠隔ノ地アル
ヲ以テ来ル八月廿五日ヲ期シ東京大坂事務本部ニ大
會議ヲ開クヘシ

第六條 大會議ニハ人算ノ多少ヲ問ハヌ一團結ニ付一

名ヲ、代議人ヲ出スヘシ

第七條 大小ノ方法ハ総テ大會議ニ於テ熟議審定ス

豫テ及上申置候義勇党ハ昨十日浅草松葉町曹源寺
於テ開會仕候処會スル者三十七名議論頗ハ過激ニ涉
リシカ結局ハ政府若シ非戰論ヲ主張スルモ吾党ハ飽
ミテ開戰主義ヲ採ル吾國內ニ亂ヲ起スモ幹ハ征メ
丁ニ議論一交ニ其手數ノ如キハ東京ニ委員ヲ残シ置
其他ハ各地ニ遊説シ且ハ檄文ヲ飛シ一時ニ募集シ八
月十五日頃ヲ期シ各地ノ委員ハ東京ニ會スル丁ニ相
災ニ申候又曹源寺ヲ以テ義勇党本部ト定メ檄文ハ昨
十日付ヲ以テ及上申置候群馬縣鎌原軍藏一名ヲ各府縣志士惣代
ト爲シ飛檄スルヲ以テ議定仕候委員ハ公撰セシ處迄ノ
人名尚撰者ハ郵座候

石川縣 中村該聞 高木鋪二郎 滋賀縣 藤公治
高知縣 守邦氏則 群馬縣 照山峻三 大分縣
世部甕雄

右、六名、御座候也。石川縣中村該聞、昨十日着京致
候右及上申候也。

八月十一日

豫テ及上申置候飛檄ハ一義ハ昨十一日出奉、今十
二日各地ニ配送、手順ニ御座候別紙ハ群馬縣ハ勝俊
吉ヨリ郵送セシ書面、内文意談地人民ノ条動ヲ得知
スルニ足ルモノト存候間、為御参考呈送候。在東京滋
賀縣河上尤右ヨリ檄文ヲ各地ニ配送致候。又、同人
ハ全クハ征幹論者ニ候間、又、御配慮、以、及、同敷
事ト奉存候。又、同縣大音龍太郎大車貫藏等モ同様周旋

致候得共矢張真純タニ征幹論者ト想像仕候。高知縣
仲江タニ爲介東京北田正董等迄今回ノ事件ニ付テハ頻リ
ニ熱心奔走致居候右西人ハ平素乱ヲ好ムノ質アリ人
ト存候間今回ニ頗ル内部ノ改革ニ着眼致居候由右及
社申候也。八月十三日

別紙

外袂以來御不音奉謝、ハ盟見益御壯剛國事、御奔走
ト奉存候儲テ先般朝鮮事件ニ付妻報一葉御送相成且
ツ天下ニ概シテ義勇兵ヲ組織スルヤノ由首ヲ延シテ
其後ノ形況御報可有之ト待候得共只今以テ何等ノ御
通報無之只又野低ヨリノ通信ニヨレハ先般會合セシ
人等ハ真正ノ忠義覺多シテ勇氣ヲ宿志ヲ達セシトス
ル志利用云々、考テ人少ナキ由申越セリ果テ然ハ

ヤ否ヤ候ニ真正ノ忠義光ニモセヨ時至リ機熟スレハ
亦是ヲ利用可相成ト存候間專ラ團結ニ御尽力有之
度候。昨日御同縣ノ河上九右氏ヨリ赤坂氏ニ宛テ、
今回ノ檄文三四葉ヲ送リ之レハ兄等謀議ノ上相度
セシモ、欽又ハ河上一人テ亦シタルモナハヤ御尋
工致候間御返報相待候当地方ニ於テモ大ニ謀ル所
ナリテ檄文ヲ叶ニ印刷ノ為ニ東京照山氏迄送致及ヒ候
間御覧脚添心被下候事ト存候該概則ノ如ク不日東
京ニ於テ大會談ヲ開キ充分ノ府ヲ刺撃致度御意見相
伺度候当前橋ノ士族モ大ニ奮發所ニハ會合シテ皆ナ
征幹ノ先鋒ヲ請願セシト圖リ是則キ真正ノ忠義光
ナレバ矢張り利用ニ為ル生等モ尽力致居候在東京有
志ノ情勢都テ如何ニ候哉概略御報被下度自由新聞ハ

且ノ論說償金云々甚不満足ナリ之ヲ推測スルニ該党
有志モ一般亦如此論旨ニアラサルナキカト深ク痛歎
致候

板公及栗氏等モ最早歸京ト存候仍テハ同氏等ノ意見
モ御義知ト存候間御通知ヲ乞フ何ニ致セバ好機會
投レ口府ヲ刺撃レ以テ大ニ為サスレハ何レノ時カ
ラレ守邦久野等ニヨロシク赤澤氏ハモ可然御致声ヲ
乞フ頃首

八月十日

小勝 俊吉

照山負檐ノ一件至急相運候様云端ニテモ脚をレ被下
度願上候

宛角多為之修之於此日情原法
刀法之成能可之事人以此為結列
紙解解之附郵便入目一挽
何能修後和為其我以此記
其人之可也之此之其此之儀
方之者之者之抱意近之何之自
休之方之代為地之方之豐之
為之何之別之到之為之何之成暖地
日之長之長之樣之新之由之何之何

度多餘、富良野之成、
山、
也

二、

三、

最上五、

朝鮮國安邊府釋主寺ノ僧侶等同謀ヲ謀案
ニテ在元山我領事館ヲ襲撃シテ下ノ企有之我寺
在元山副田領事并ニ在金山前田總領事ヲ以
テ通牒去リ之等其寫狀係此段書也

十六年二月二十二日

外務卿井上馨

太政大臣三條實美殿

安邊府

距居田
我五里

釋王寺

ト申スハ李氏開國ノ時創

建ノ寺ニテ當國ニ於テハ隨分大地ニテ僧侶モ多敷居

住以居ル者、少クシテ五六日前ヨリ右寺ノ僧徒同謀ヲ

召集ニ本館ヲ襲来ノ企有ル、凡ソ以テハ用

掛中村彦次郎ヲ私ニ弁察官ニ遣ニ問合ルモ同官ノ

答ニ六七日前同謀ノ僧密ニ自首以テ釋王寺ノ

僧徒中ニ此ガ主謀トナルモノアリテ同類ヲ集メ德源府

及辨察所ヲ破リ次テ居田地ヲ攻メテ其手筈中ナル類

申述メ付德源府使リ直ニ威撫巡警ニモ之ヲ報メ同

今其主謀者捕縛中ナリ、不日明メテお成ノ事趣申答

由薄ル、此儘為差大造ノ事ナリ、又テス、且ツ已ニ捕縛者

多シ、極列氣遣、有ル、又ハ其ノ民昨午京城事、爰

自以東人心自不安ノ場合ヲ不免折柄ニ以テ保
護軍艦ニ可成早ク當港ニ廻リ様返成事ニ金山
領事館ニお送り及至ル程巨細ニ篤下ニ勅諭全
ノ上坂知事ニ以テ教具

光緒二十一年一月十六日

領事 副田節

外務卿 井上馨

今五日元山津ヨリ陸飛脚歸着仕り又五六日
以前ヨリ安邊釋王寺ノ僧徒等回謀ヲ請集シ
元山津領事館ヲ襲撃ノ企有之云凡例ニ付
副田領事ニ於テ探偵爲政トシ又釋王寺ノ僧徒
中ニ之シカニ謀トナル者アリテ徳源府使ヨリ真威
與巡警ヘテ報知シ目今主謀者探偵捕獲中ニ有
之者ハ爲差大事ニモ育之間數候ハ氏客年京城事
變後ハ自然人心不穩ノ場合付保護ノ軍艦回港ハ
廻航方取計ヒ可申様副田領事ヨリ要曲申奉リ且
閣下ヘモ同領事ヨリ及上申ハ趣ニ有リ此ハ日進
艦ノ儀也過日天城艦ト交代即今馬津ヘ回航中
付本日出帆ノ風去一船第一周洋九ノ如ク流艦也

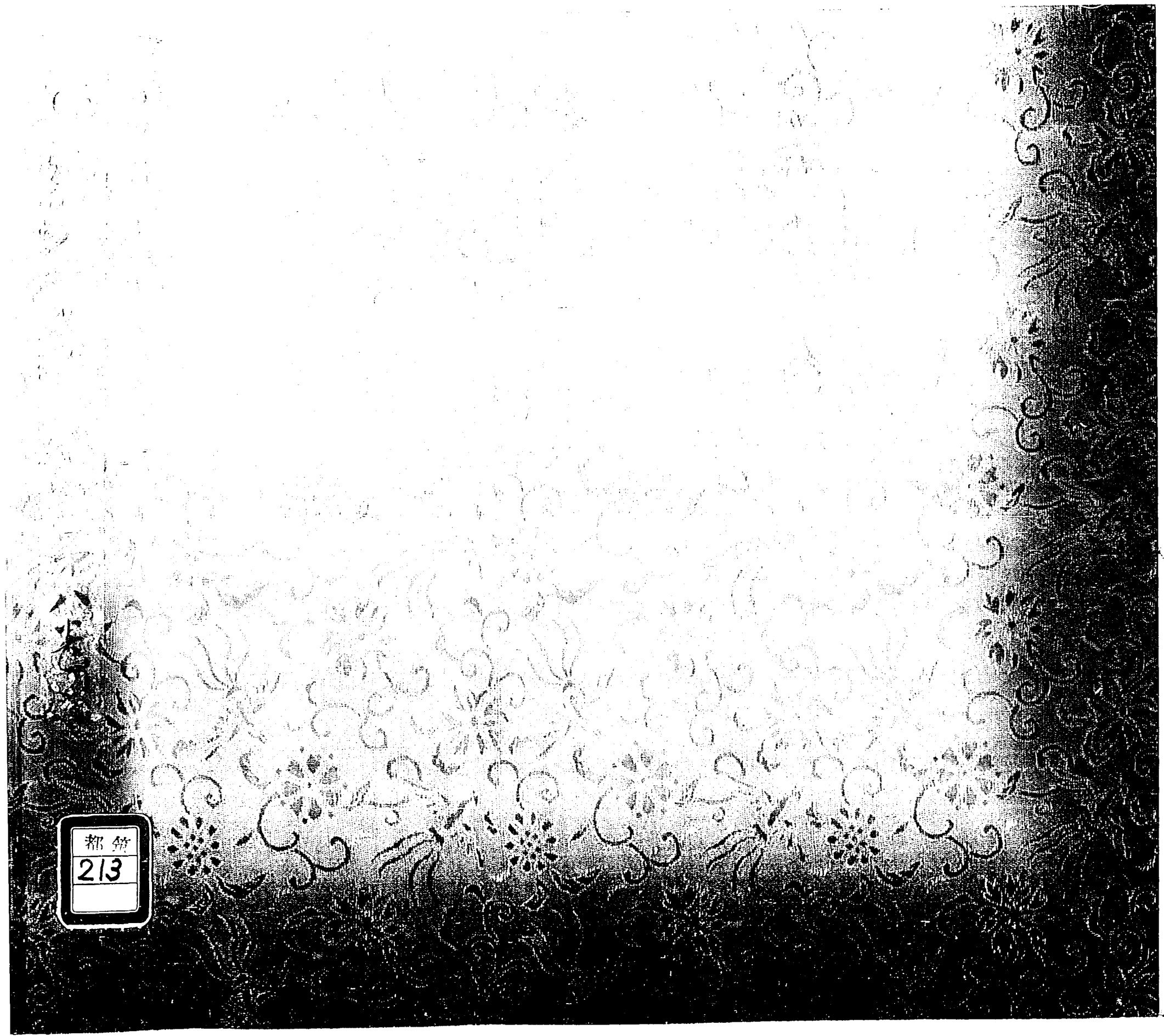
速元山津、回航、成、係、下、官、自、直、船、長、坪、井、
海、軍、中、佐、及、照、会、百、以、間、出、没、其、状、仕、色、取、吳、
在、釜、山、港、

十六年二月五日

總領事、前、田、獻、吉、

外務卿、井、上、馨、殿、

近、元、船、没、船、間、合、身、出、現、風、走、船、第、一、
周、洋、丸、托、中、信、進、達、仕、の、念、出、没、の、中、之、



都 第
213

43 3.30

757029

漢 昭 帝 始 元

初 年 春 罷 五

刑 之 為 時 也

今 帝 始 元 十

年 春 始 元 十

年 春 始 元 十

年 春 始 元 十

付到生熟茶

一斤一斤

一斤一斤

一斤一斤

一斤一斤

一斤一斤

一斤一斤

一斤一斤

一斤一斤

先子名序

草
川
改
爲
記

以香亭書

午年午月午日

ひきき

陳忠之

如
一
方
厚
固
也

子
抄
家
生

丁巳年

年より一周年
毎
16

先を
一
陽

より
一
福

後
一
中

し
一
中

後
一
中

後
一
中

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

うさぎ

如子句

九
子
子

部山石

王

当时候
子
子
子

部
長
石
石

男
部
部
部

道



車
車
車
車

田
部
部
部

お刺

市所

新叶切後山方

河の水をミル水

寺に家がある

先頭とる家

いふ

力の

都龍山集

麻布區飯食便宜
都築部六樣
自持事使
親廉

引成

日本書
和唐書

時日長矣
食之
亦無聊
身自任
之
可
而
王
主

[illegible]

[illegible]

新地分書

丁未之春

春

名

也

時

一

時

一

時

上

下

中

左

右

前

後

左

右

前

後

上

下

中

左

書新地分書

丁未

有春

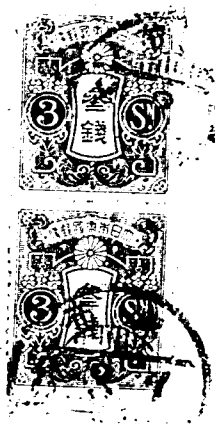
[illegible]

[illegible]

極其的之全一
 由之大先
 於之五者
 和之物也
 海之曲居
 山之多木
 力所由中
 會之上平

三月廿五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日

謙益
謙益
謙益
謙益
謙益
謙益
謙益
謙益
謙益
謙益



初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日
初五日

法安者奉賀尔又
是中立尊称
名之不闻其名
拙书在台在
是日王城之火
令过天回等
陰謀之生以
除舊王城一
將之我利久
是

迷信深キ

王様仲

子孫せうく不消止

仲止冷國王

目下米館隣

関金館は位方木

共

例志カハニ事達

如候音は出費

後一時掃捕也

又、家状、陷川

一、力シテ、駐目公使

おそれるに足る事あり
一騎馬の内合候
望む可なり
者あり、中柄は
上より下へ
分る事、赴任の事
候前、我々の
相合、十年、毎
年新、江、弟、孫、子

以爲一書中必至
有之其也。所有皆
之方針。之也。見
子。之。之。等。也
之。一。陸。戰。後
寸。之。上。高。山
度。之。北。
之。之。之。之。之。
家。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。
之。之。之。之。之。

可くしんふて我艦隊
トスル挿子アリ
東証鑑一ハ大満年
挿子と見えじ
此後知カケテ
四月六日
環走部
松加
山本

心系林市相穴
那鏡聲有六数
新教天

林也京城
林悟也

持以爲中冓之寶
其有之者奉以爲
今朝青山入我懷
此老老之風作何來
疼痛乃起上心口
能一不女意者
欠此中必有慈悲者
在彼中必有慈悲者

如法書

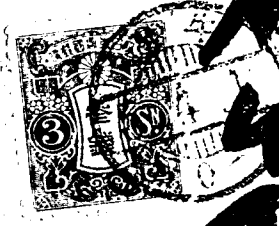
升也

四月一日

鎌倉

新刊世界書局

麻布區食糧所
都筑男海下



力

一

月

日



福原鑑

東京市牛込區北町五番

Handwritten signature or calligraphy in bold, expressive strokes.

持勝世の金に情通

人かたき世に金に情通

とて下を金に情通

はと世に情通

本人も情通

其風情に情通

其後注者に武井武隆

并に注に武井武隆

武井武隆の友に

實事求是 文以載道

張王其時 境遇其

深人日情 有し何と書

地位 事少多と語に東

江合と金トる 積累

作に方其ま 採焉も

可法制局に 材用物し

大原に 有以少と如く

上と式に 改裁おわ

実と下 同文を回し 轉に

かき文にシテも書らば
之を大に誣衒と看し私
情とあるに非ざるの望
まらるるを乞ふに可なる
誤り世に誤り得くとも
又も之を至とせし書に
誤り極に即ち極の
筆に少くとも十分
に筆を盡さざるに非ざる
普通の文に非ざるものと其
趣を失はしむるに非ざる

三見ふ不男をえりて
交事乃に様あしる法
官膳之人と得度
二式有力者援助者の辞
し叔實と感しり柄
後王者はとい基のま
然しはよりぬは端原
又武井式とて用物
望み自に之官等様
の存事及たる一く
半葉に任人
冷たき
を

の徒にふかし神を痛
むるものなりとて生
の甚るるに憾と云ふに
は鐵道及生利の
本年有りこゝに上るを志
す事と千人の多き數
の日は神旋とて多
す玉座效粒とて生
も乃ちたゞし力と

湯し中を其後屏
心厚志に皆其
道恨を以て求
事情之西を以て取
委曲に相与して上
述の意を以て相
与

七言

黄

相公在堂料以

之相公在堂料以

之相公在堂料以

之相公在堂料以

之相公在堂料以

之相公在堂料以

之相公在堂料以

之相公在堂料以

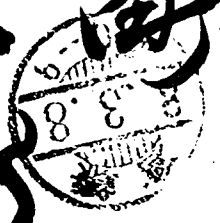
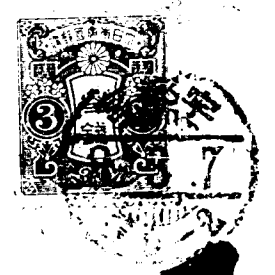
之相公在堂料以

可一述り
交寄
持

三月廿日

都筑知事殿
謹上

神志川知事殿
都筑知事殿
謹上



以
三
富田知事

料沙憲法ヲ七十條ニ依ル
村事地官より軍餉傳えしり承貼片
事、時白ノ急ニ因シ事情ヲ知ル外都府
ニ宣望上ノ意見ニ相立ぬ
河此方友
古記官ノ報告ヲ案ニ據適當トナリ別
何ノ異見ト云フ

元來憲法ヲ七十條ニ要例ニ属シ最之ヲ慎重
ニスヘキモノナセシリ然ルニ金^{〇〇〇〇〇〇}額ヲ定メス
テ公債又ハ借入金ヲ為スヲ許スハ國家財政上
甚宜トナリ美ニハナルモノナリ故ニ金額ヲ

樞密院

正メテ此際急ニ勅令ヲ發セラルヘキモノト曰
不固ヨリ時局ノ進行ニヨリテハ豫メ金額ヲ定
ムルコト能ハサル所ナルヘキハ勿論ナシトモ其實
ニ緊急ノ必要アラハ更ニ引續キ勅令ヲ發シ
金額ヲ増スコト何ノ支障ナシ又憲法ヲ七十
條ニ憲法ヲハ條ノ法律ニ代ルノ勅令ノ場合ト異
ナリ臨時議會ヲ召集スル能ハサルキ對スル非常
ノ要例ナルニ付成ルベク至急ニ議會ヲ開キ其
金額ヲ議セシヘキ性質ノモノナリ故ニ嚴密ニ
論じしハ議會開會前ノマデニ差迫リ必らず
ルヘキ費用ニ對スル金額ノミヲ豫算ニ先ツ之
ヲ定メテお命トシテ發布アルヘキ似たり。

若し政府の命令に準じ、政府は公債の起し及び契約の爲に濫用する権能を有するに付、そのハ可なりト
又ハ東京鐵道會社に對し、其社債の對し得
證するにハ必要ナル補助を爲すこと、海に規定
スレハ可なり。然レトモ本命令案に於テ公債ノ利子
年限、社債ノ利子年限、補助金額等詳細ナル
規定アルハ國庫財政ノ移上之ヲ必要トスルモノ
ニ出タルハ（し）。金額ヲ定むべきモ此レト曰フ從由
公債ノ

樞密院

ナリ

明治七年八月十三日ノ財政上必要命令ノ件ニ
付、命令ニモ曰標、軍事公債ノ額ヲ定ムス際、
令ヲ定むべきハ先例アリ（故に政府當局者ト
シテ又本院ノ事務ノ取扱上ハ此ノ先例ニ依リハ
故ラ先例ト見做サルコトナリ）故ニ報告書
案ノ通りテ敢テ異議ナシ（唯、此ノ先例ニ對
シテハ、同年八月十五日（議ニ同時）更に本院
ノ諮詢ヲ經テ命令ヲ定シ其金額ヲ定ム前際
多の令ノ権能ヲ明記シタリ。

本命令案ハ、利子、償還年限等ヲ包含シテ
規定セリ。明治七年八月十三日ノ條、命令トハ
併載シ異ニス。故ニ、當局者ハ更ニ之を圖シ別ニ所
諮詢ヲ經テ報告シテ金額ヲ定ムルノ先例ニ
依ラサルノ意ナルヤルニ付、

要スル、先例アリト云フ点ニ於テ本初令ノ成
案通りニテ可決セシムルハキエトモ存シテ
下。但し假リニテ外者トシテ考フルハ前途ノ疑
ナキ能リス。先例或ハ事宜ニ便ナルモ憲法上
國會多計ノコトヲ非常ニ窮屈ニシ先令傳

樞密院

ノ精神ト相付ハサル嫌アリ此点ノ三ツ
表相陸海軍
也

十力
三ツ
穆模ハヤ

新集重臣官長殿

上ノ海軍大臣ノ昇進ニ於テ海軍省長官トシテハ明
カニ金範ニシテ^{海軍省長官}報キコレモアリ或ハ又外交臣
上金範ヲ明言スルヲ不儀トスル点トアラン是レ
然ルノ故ニ^{海軍省長官}同知セザル所ナリ。又海軍省長官
字上本初令案ヲ不費ナリト申ス意のミセテ^{海軍省長官}即知ス

新集重臣院書記官長殿

鶴橋八景

考證重訂官長殿

上金部シ明言シるル不係トスル立トアランシ是レシ
 望ノ立ト少量共ハ同知セサルル又モ常ホスル
 字上本勅令案ヲ不要ケリト申ス音ノミセスル即チ知ルコトナリ

都察院書記官長啟

於部

香

本院

積功累

名 称	牧野伸顯文書
標 題	伊集院彦吉

分 類 番 号	154
	12

国立国会図書館

登録番号	
------	--



東京市牛馬
牧野仲男氏
御覽



竹

初學五侯七貴

[illegible]

[illegible]

シテ同情合ふ所随也

初未件然之使るも自由成依

頼上上誠清あ慈心代下あふ

宅より清くするも其の年入るも

只の所より其の年入るも其の

あふ其の年入るも其の年入る

多少其の年入るも其の年入る

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

其の年入るも其の年入るも其

定多ありは

第一ふは是非未定なり

非なるは其の如く

或は其の如く

然るに其の如く

山藤おのり

松野の如く

中一山藤

右に

先

先

ア

と

と

伸

松

江

先

先

先

先

先